成田名所図会

五

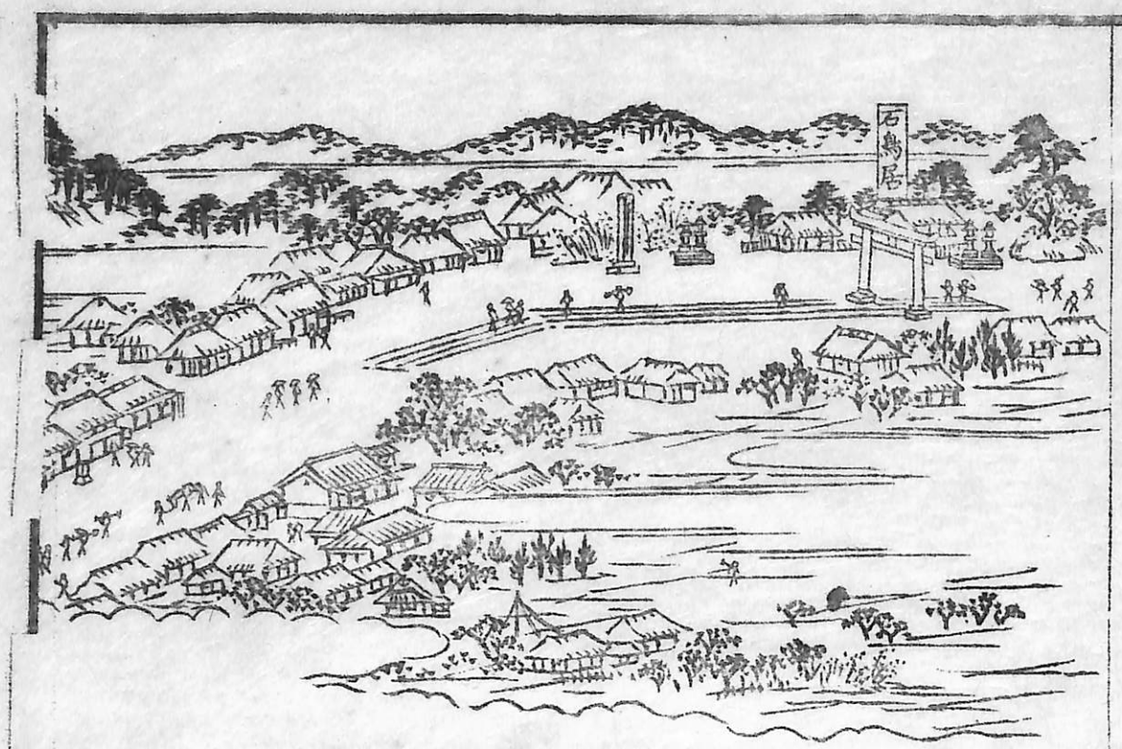
成田參詣記卷五目次

成田山縁起 和氣清麻呂贈官 埴生郡四郷考 寛朝僧正傳 平將門始末 同鉦 旗 道擧上人傳 同法衣 名号 墓碑 木像 鉦
本堂 銅燈籠識 二王門 額字 經藏 三重塔
御手洗井 寶庫 本坊 額字 遍照院 南光坊 正福院
延命院 奥院 額堂 文晁額 石鳥居 光明堂 大師堂 觀音堂
阿弥陀堂 藥師堂 地主妙見社 白山社 秋葉社 金毘羅社
疱瘡神社 清瀧權現社 弁財天社 聖天社 天神社 淺間社
稲荷社 三宮社 天神社
天國寶劍 倉魂像 古甲 古面 祐天上人百遍名号
圓光大師名号 籠念珠 樂器二種笙笛 延元元年碑
明德五年碑

寺臺村 永興寺 小野忠明夫妻木像
公津臺方村 麻賀多神社 印播郡七郷考 船方村 藥師寺 応長元年鐘
宗五墓
下岩橋村 大佛頂寺 弘法大師心經 古鐸 古碑 欠真間村 吉田陣屋跡
妙澤不動

成田參詣記卷五

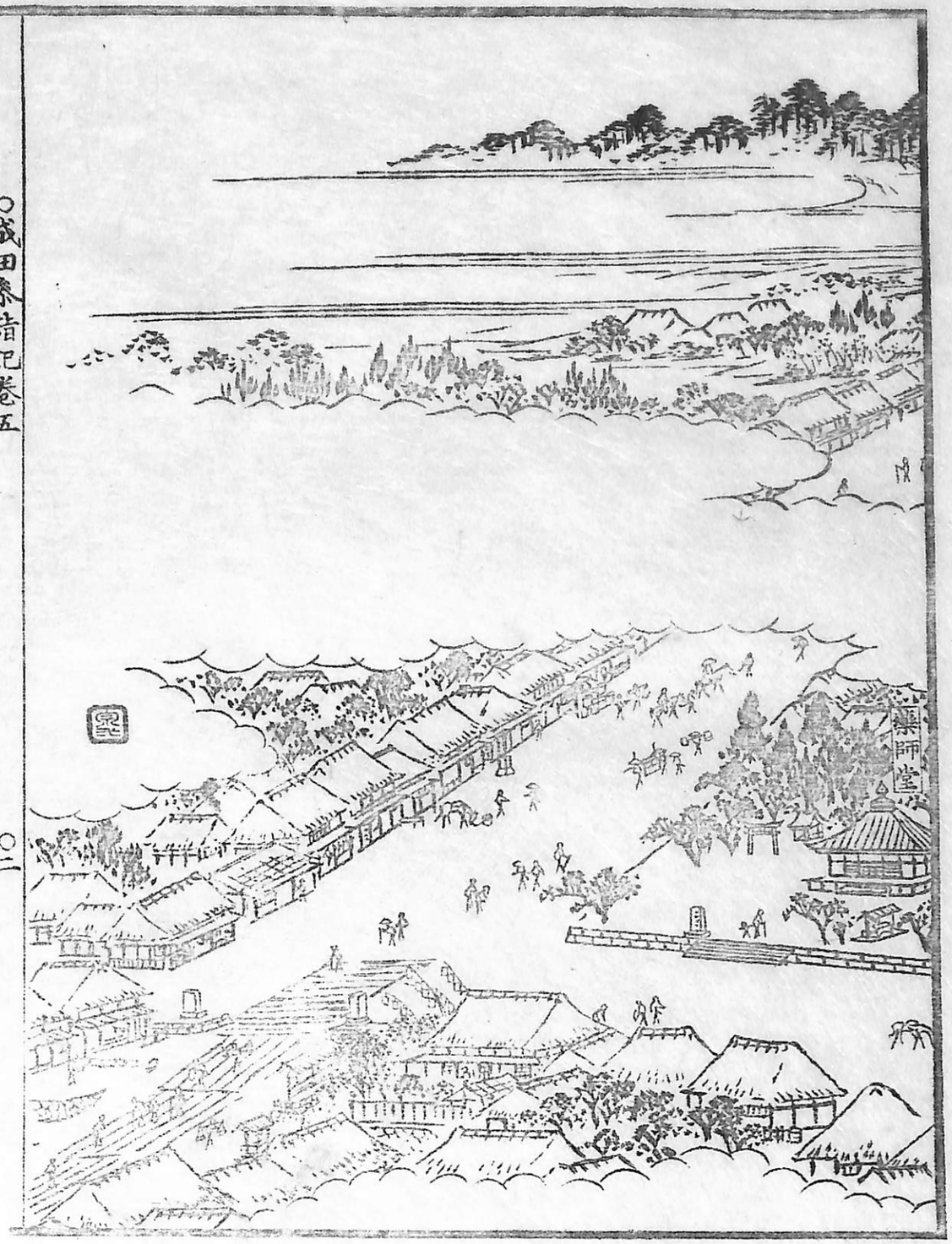
成田山明王院神護新勝寺ハ埴生郡成田村ニあり新義真言宗京師上嵯峨大覺寺御門跡末なり開山を寛朝大僧正と云ふ本尊大聖不動尊ハ弘法大師の開眼なて高雄神護寺の護摩堂の靈像なりしを　朱雀天皇ゟ御世天慶中廣澤遍照寺寛朝詔と奉りて叛賊平將門を調伏のをり其靈驗の現なるを以て僧正下總まて供奉し給ひ修法セしが幾程なく貞盛秀郷ら為ニ將門へ誅せら れをり是偏ニ明王ゟ威德なりて猶東國鎮護ゟ為ニ尊像と長くこの地ニ留え ら れをり　珍迦羅制多迦ニ童子ニ云ふ



成田山境内圖

註黒不動ハ日本武尊ヲ祭レリ故ニ祠前ニ華表アリ此地ノモサル例ニヨラレシニ赤石華表アリ

ゟ此地ニあり〜ハや今井戸のあるカ）と童子と云り○海保氏ノ記ニ永禄九年六月廿八日公津原より八伴なりと日ゟ論田ゟ吉境内の地ニ移し と言ふや ニ元新うて道俗群集をなして市の如しけるニ天文中ニ弓大嚴寺開山道興上人法器の不滿を歎き祝尊像ニ祈請をなして明王ゟ利劍を呑血流れて淋漓たりと夢む覺て後智識大ニ進み道德益



其二

棟梁集

松をもみのの杉

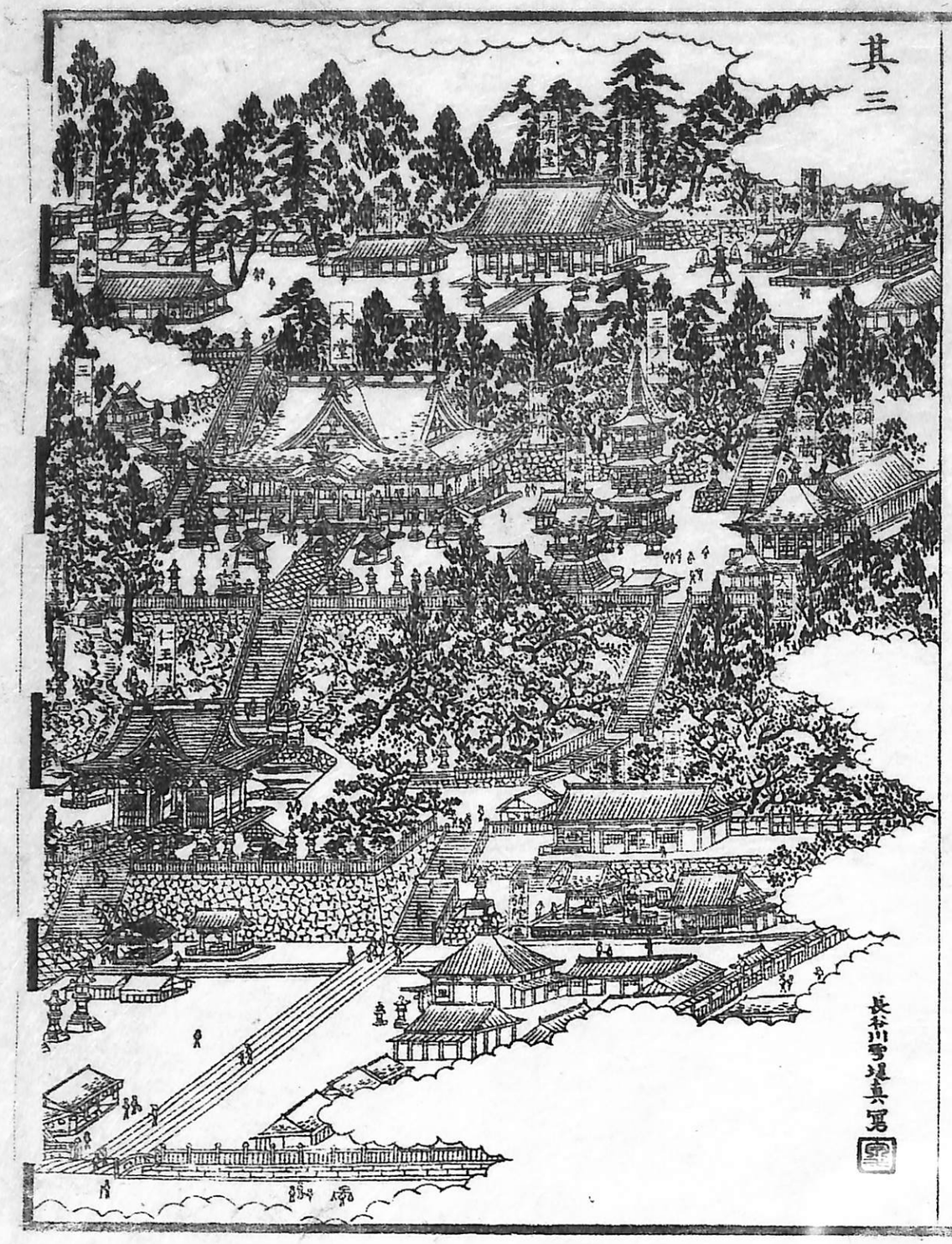
杉をもとをひて

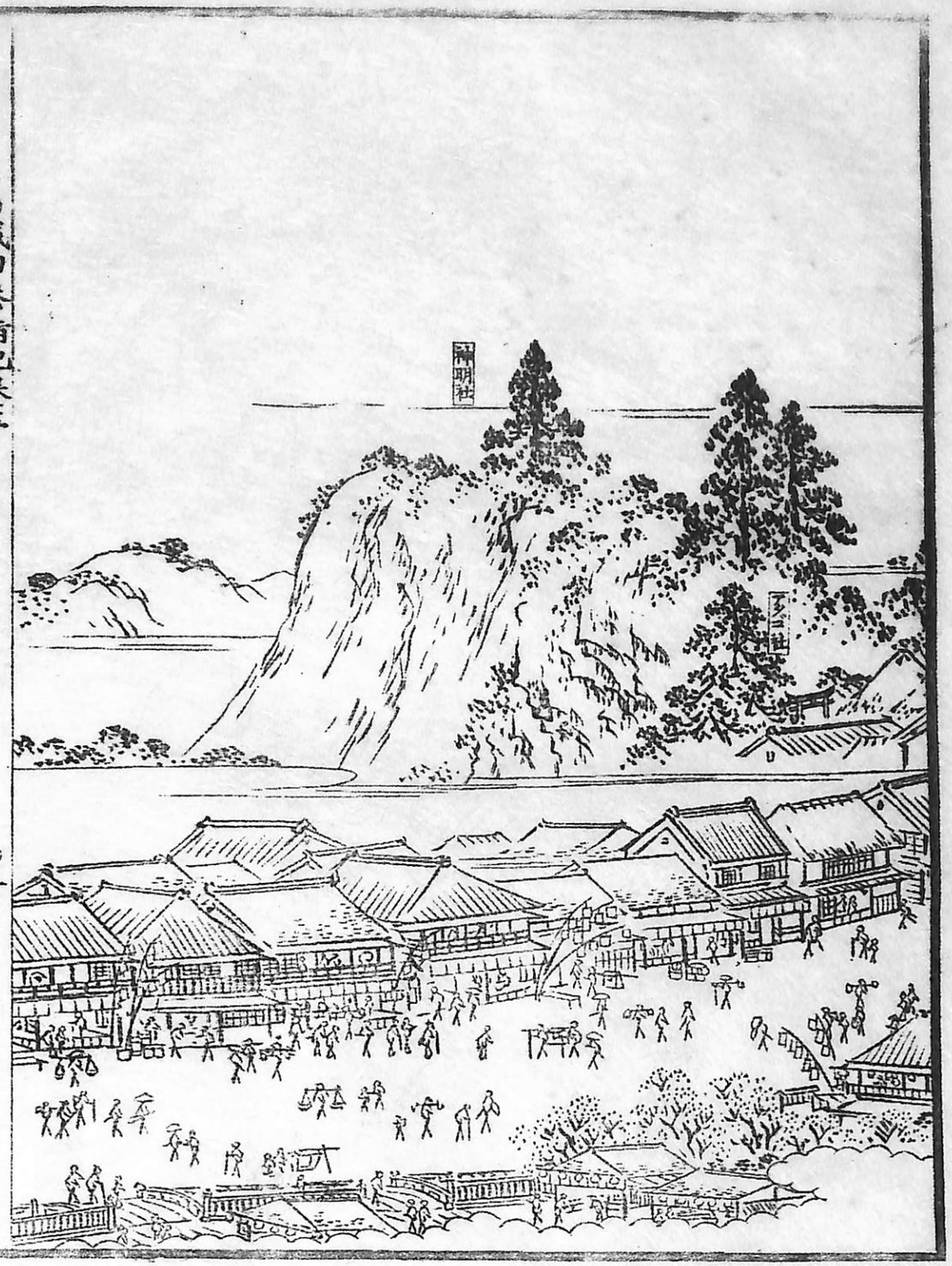
はろうこうぬ

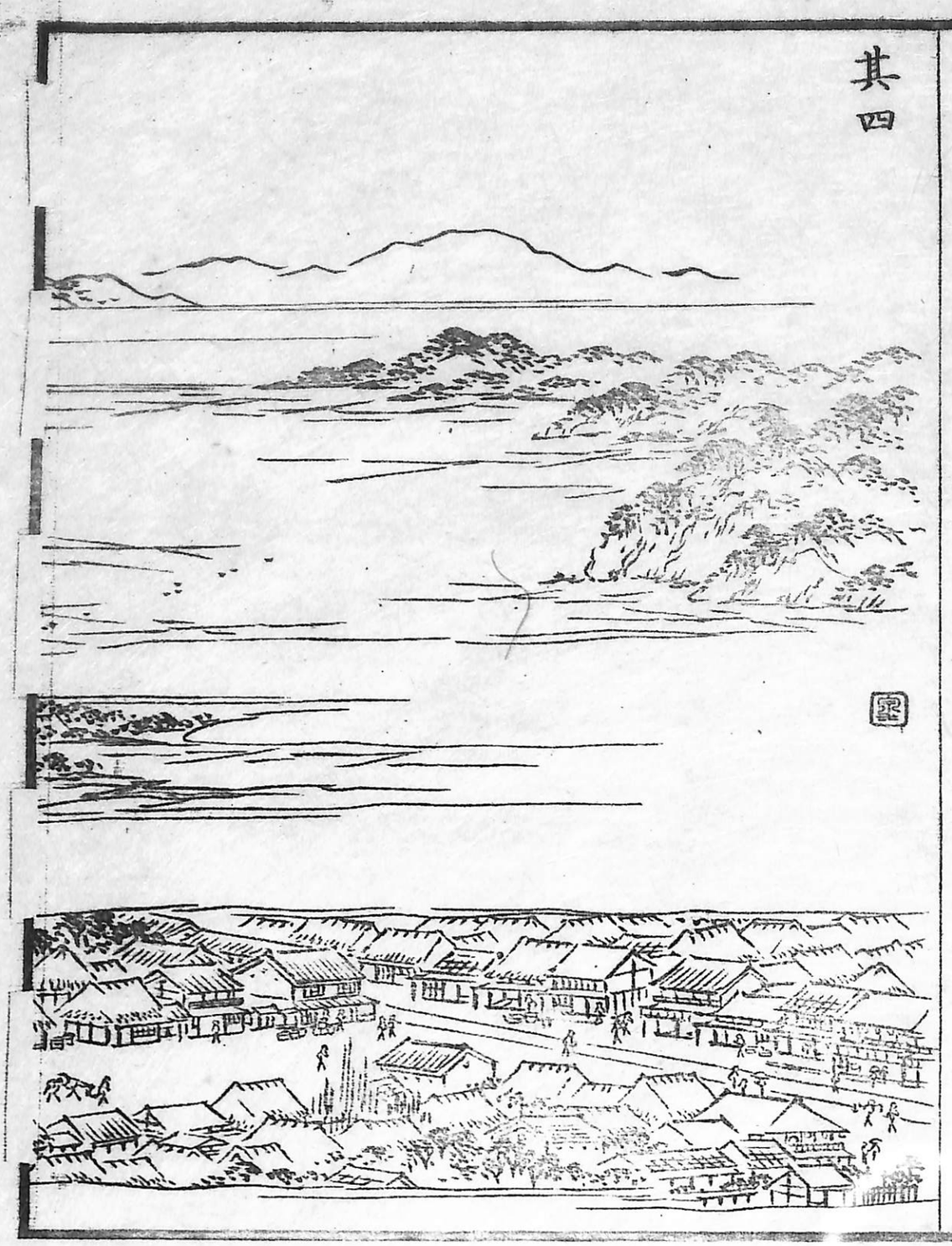
法の屋こそ

与清

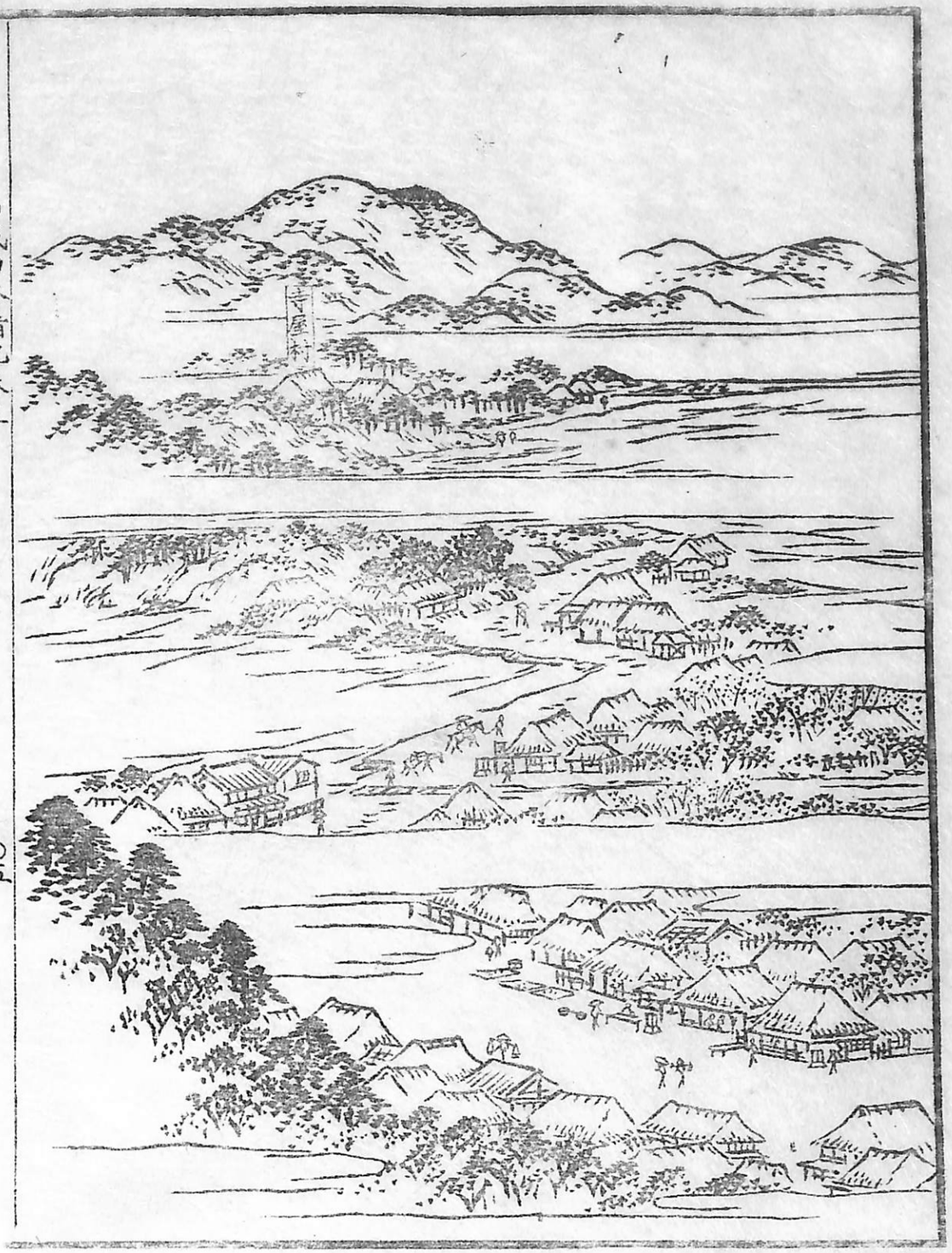
其三







本坊
大師堂
遍照院
弁天堂



顯祇世小名譽の高僧となれり今其法衣大嚴寺に存し當山開廟のをり拜セしむるもの是なり其境たる松杉欝茂として青苔路なめらかなり護摩修法ゑ烟たゆることなく鈴鐸の音鏘々として國家の昇平を祈り信心肝小銘し渇仰胸小溢る堂宇の結構伽藍ゑ莊嚴實小本州無比の大道場なり毎月二十八日八参詣の緇素肩を摩し袖と連社寶前小絡繹たり中小も正五九月ゑ繁昌八喜捨ゑ浄貝堆をなし樂施ゑ清泉張うごとし銅瓦雪小聳え金鈴風小吟し其金盛なること普く世の知る所小して筆紙小尽し難し他邦のくいとたゞ此靈區小詣てハ其溢美小非るを知るべし

以上縁起の要と稿む文保起ゑ志に元禄十三歳在庚辰仲夏念八日武城愛阜田福苑菫覚眼書とあり

○山州名跡志巻七小高雄山神護寺　光仁天皇ゑ御宇和氣清麻呂奏開し淳和天皇天長二年當寺を建立ゑる所なりこゝ仍て神願寺となつく　寺を以て空海小賜ふ改て神護國祚真言寺と名くこゝ金堂ゑ本尊八

藥師如來講堂ニ五大尊ト共ニ弘法大師の作ふり五大尊の中ニハ護法即不動尊なり乃社ハ和氣清麻呂ニ霊と祭ると見ゆ色葉字類抄太部ニ高雄寺元者号神願寺其後弘法大師改神護寺當寺者

神天皇御願云々

○大日本史巻一百二十列傳四十七和氣真綱傳ニ初清麻呂使宇佐還欲立伽藍安佛像經論以助神威遭竄不果延暦中私剏河内神護寺真綱為河内守与弟仲世等請廢定額高雄寺以神願寺為定額改号神護國祚真言寺云云

因云嘉永四年三月十五日讓王社ハ朝廷より正一位と贈ら祀柳宮より三十石の地と寄給ひしハ誠ニ希代の盛事なり其宣命ニ

天皇我詔旨良乃贈正三位行民部卿兼造宮大夫和氣清麿朝臣尓詔布勅命乎聞食止宣布奈良宮乃御宇尓浄久貞尓明留奈心乎以氏仕奉加利志宇佐尓詣志時猶正久直岐真事以氏請問奉留大神毛尓志教言乎人氏悟志給比慈美給比志依氏君止臣乃止道験久立奴大坐氏貴久畏岐御世波乎下止志上乎凌岐上氏止志下乎欺止久乃古有津良尓身乃危乎不顧雄々志久之能烈岐氏利汝徴心氏君乎尽者世留古乃人乃云氏在久危尓臨氏致命又云良至忠至正氏尓世尓顕留事乃不足乎古止歎給比隠美道給布以濟止云留者汝乃事奈良然尓留氏君乎以氏吉日良辰乎撰定氏讓王大明神尓崇給比尊給比又御冠位乎正一

○成田参詣記巻五　○六

成田山全圖

二ウガイト云字アリ要害ノ訛カラシ
此所ニ成田五郎ノ墓アリ

土屋村

滑川村道

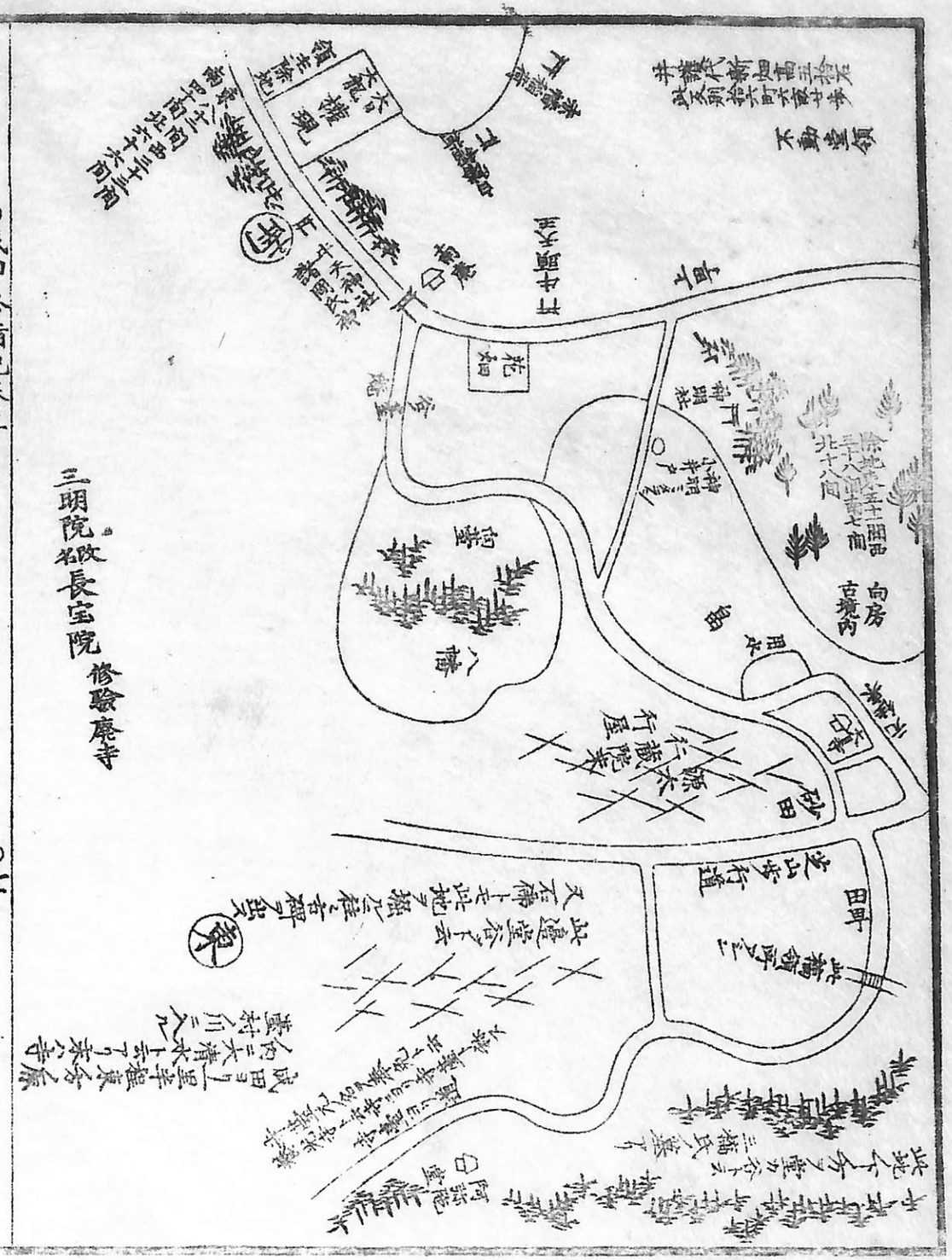
成田山

延命院

永興寺末

安養寺

除地東西四十八間南北十三間



三明院改名長宝院　修験廃寺

位ニ上給ハ治給ハ従四位下行神祇少副兼淡路守ト部朝臣良禅ヲ差使ハ御位記ヲ令捧持ス奉出給フ此状ヲ平久安々聞食ス天皇朝廷ヲ堅磐ニ常磐ニ無動ク夜守日守ニ護幸給ハ天下泰平ニ伊加志御世乃足御世ニ護恤給ハ恐美恐毛申給波久止申　嘉永四年三月十五日三月十五日

當日ハ勅使行向ひ祭禮いと嚴なりしそ

神護新勝寺又金剛王院と称ス延享三年寺記ニ右院号ハ大覺寺御門跡御院家を兼帯仕候故名乗申候尤御令旨頂戴仕衣　著用仕候依之從御門跡道中人馬御先觸被下候御関所駕乗罷通申候右之格式御坐候間御城主様御帰城之砌寺社方御禮之儀別席ニ而御禮申上候と見ゆ

○埴生郡ハ文字の如く埴生ひなるべ　和名類聚抄ニ下総國埴生訓波牟不或云牟異本爾ニ作る今ハつとよぶ音便なるべしにて地名ハ土人の称呼ニ却て上古のまゝなるを第一心付へきことなり

山姫と祭祀り因ある事ならん　岡田郡大生郷の内ニ羽生村あるなとニ社ハ大生村の近隣ニ古ハ埴生とりふ村あり

此郡中世以来廢して香取郡ニ属し埴生の庄と称せり貞享三年

寛朝僧正護摩を修する圖

を復郡に建る

○和名類聚抄に郷名四代載る本郡竜角寺は天平八年千葉邦胤文書に埴生十五郷とありこの四郷は例の郷司の居し地なるべし　玉作山作の誤か　陸奥国玉造郡訓太多豆久里駿河国駿河郡玉造郷多萬都久里土佐国安芸郡玉造郷多萬都久利共に玉造小つて玉作小作なる歟　山方は今山口等は地名なるべし　山口は陸奥郷部村あり　麻在は麻生酢取は羽取の訛ふらん

伊能穎則云此は埴生の省なるべし　生は元清音なるべきと江戸の麻生と壬生の生は濁りて生と云来れり　埴生を此類なるべし

○或云成田は熟田なり　佐倉小大井戸と云あり傍に成田と云字あり村名は是より起りなるべし　此地は和名抄に載る所の山方郷の内なるべし　近隣に小山口村あり　山口は山方は前と云義なるべし郷部村とふあり　郷部は郷分と云義なるべし　成田村と郷部村の境に三宮と称する社あり　此社の氏子と称する村十一ヶ村あり是古への山方郷の地なるべし　山口・土屋・郷部・成田・寺蕾・押畑・下金山・東和田・関戸・新妻都て十一ヶ村也　三宮は古へ郷司の崇め祭りし神也其分内の人は今猶盛ることと見えたり　佐倉風土記に山口村に稲荷神社あり社傍に

元弘中千葉貞胤臣山口周防勸請山城國稲荷四社祭馬廣長九年郡官大明氏再造之有七國於三十年前枯矣ゝと見ゆ旧地なりと推して知るべし

○元享釋書卷四 小釋寛朝吏部尚書敦實王第二子　寛平上皇孫也從寛空阿闍梨稟密旨永祚二年天禄上皇禮朝受密灌朝粹密學居遍照寺啓密肆世稱廣澤密派永觀元年為圓融寺落慶導師敕給一百戸寛和二年為大僧正長徳四年六月十二日化朝善聲明般若理趣分作音調誦之密學之者傳其韻弄

○宇治拾遺物語卷十四 二條 小寛朝僧正勇力ありしことを載たり同書小仁和寺ともそうけまいらせ見ゆ　今昔物語卷廿三 廣澤寛朝僧正強力語をのせたり此人凡人小非ず式部卿の宮と申けゝ人の御子なり真言の道小止事无うけゝる人ゝ甚人の廣澤小住給ゝ小亦仁和寺の別當ゝなりもたわ一事紙ゝ云ゝと見ゆ　日本紀畧小庚辰天元三年十一月一日庚子廿八日丁卯云ゝ今日於兵衛府御修法僧都寛朝修法乙酉

寛和元年四月一日乙亥廿八日左大臣源朝臣仁和寺西建立精舍大僧正寛朝且有昆弟之義且有師檀之契同心合力所令修營也云々　已丑

永祚元年十月廿六日甲戌大僧正寛朝建立遍照寺供養之左大臣以下諸卿参向外記史同集會戌　戌長徳四年六月十二日己亥法務僧正寛朝入滅八十四東寺長者補任云　東大寺別當次第三十五　小僧正寛朝永觀二年二月二十三日官符真言宗東寺湛昭不治替寛平法皇御資廣澤御室第八皇子式部卿敦實親王二男也中略　天元四年八月晦日任僧正云々　寛和二年十二月廿五日別當僧正轉大云云

伊能頴則云當年寛朝八十四にて死天慶三年八廿五なり是より四十年を經て天元三年大僧都同四年僧正此後七年を經て寛和四年小大僧正となる天慶の比より一頭陀なるべし

○或書小五大尊中央扇不動明王本地大日青龍疏降伏一切鬼魅諸障惱者

○成田参詣記巻五　　○十

七羅刹羅本地観音合定恵二手掌ハ制多迦本地弥勒左手把古杵右手捧金棒

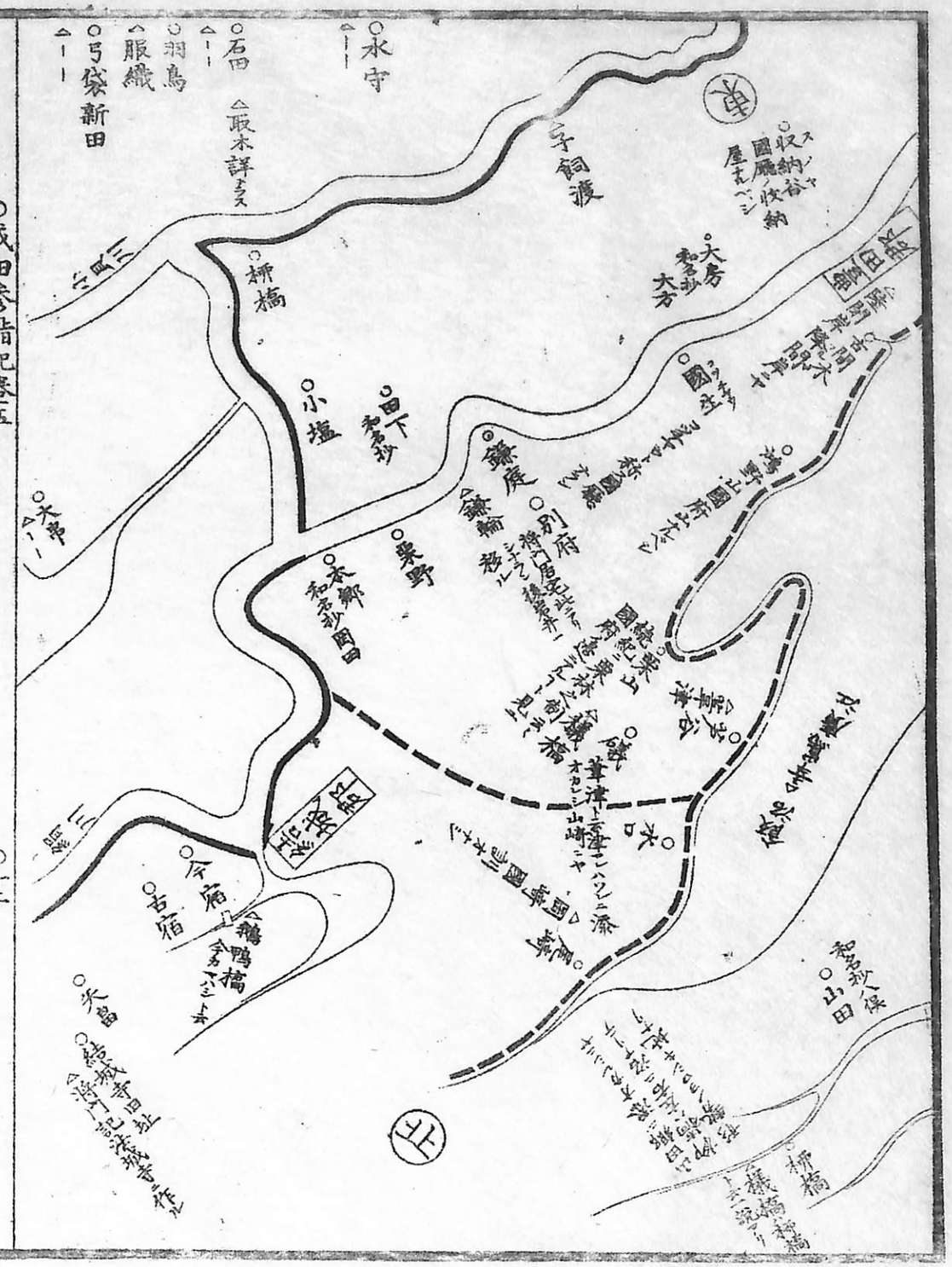
云々　當寺の二童子ハ一童子蓮と持一童子古杵と把れり

○平將門ハ葛原親王ヨリ後ハ出づ親王ハ桓武天皇の皇子ふり親王の子を高見王とふ其子高望姓平氏と賜り從五位下小叙し上總介小任せらる六子あり國香良持良兼良繇良文廣子と良正とふ良持鎮守府將軍小任せらる八子あり長將軍太郎將持次小田原次郎將弘次相馬小次郎將門次御厨三郎將頼次大葦原四郎將平次將文次將武次將為之將門ハ母ハ縣犬養春枝の女なり將門下總國豊田郡ハ居性桀黠にして勇悍人まされ少うして楠政藤原忠平に仕て頗る勞と積け糾バ龍口衛士となる故小赤滝口小次郎とも稱せり嘗て忠平公小就て檢非違使佐とならんと求む公許さゝりけれハ將門憤と懐て郷ハ帰り徒属を率ひて攻剽を事とす是ゝりさき前常陸掾源護ふ女姿色あり良兼將門並ハ婚と

求む護ゝ良無ふ許に良持已ふ幸して良兼将門とその遺田を争ふ
是ふ於いて将門良無護等と隙あり兵を發して攻んとせ良兼をと
ら佛を信じて怨争を欲せに故ふいまた兵を構ふいたらすたまく
常陸人平真樹と云者護及び國香を恨ることありて将門を護を悪と知
り将門と謀りて二人を殺さんとを時ふ國香ハ常陸大掾まて石田ふ居り
良兼下總介まて上總ふを祇り 将門の事跡を記ものの今昔物語古事談扶桑略記日本紀略等數種あれども共ふ大須本将門記の實なるに〜〜〜〜故ふ此記をもて本據とし傍ら諸書と排列し稍く其事實を得たり且その居所淫前多く相馬郡とに然まとを将門記ふハ豊田とにその戦闘ふ地勢を尋繹るに一〜〜的當す故ふ今斷して豊田郡とに猶畧圖をあけ當時形勢ふ概畧を知らしむその備てらるるハ後人の再び検査るを待のみ○紀畧巳亥天慶二年十二月廿七日癸亥下総國豊田郡武夫奉於平将門並武蔵權守從五位下興世王等謀反虜掠東國信濃國飛駅奏是亦豊田郡ふ居りしに一證ふ備べし

○将門のみ上ふいふ外大鏡一外記日記一大日本史二十
皇和真俗通二十本朝文粹二元亨釈書十等ふ見ゆ
将門年三十三

承平五年二月二日 正統記自注 将門真樹等兵を率ゐて護および國香を襲ふ國香後等ふまとを知り護う三子扶隆繁と兵を野本ふ出たしてふれを禦



く國香扶等敗走ス四日將門勝小乗て野本石田大串取木小放火し遂に筑波真壁新治三郡小たらひ國香扶等及その部下の宅舍を燒く事凡五百餘家國香自殺し扶等戰沒ス將門記 國香ハ子貞盛掾平太と称す十訓抄本常小作る一本ニハ掾ハ是らりさき京りあり左馬允小任ス今昔物語變を聞て慟哭し急に郷ニ帰りて父ハ尸を收葬し佯りて和を將門ニ乞ふ良正ハ護ハ女壻小りつねハ護ハ三子の死を悲しむと雖ども仇を報せんと謀る十月廿一日兵を新治郡川曲村小出し將門と戰ひ敗走ス廿二日將門本郷小帰る良正使を下總小つかハし良無小援を乞ふ將門記

年三十四 六年六月廿六日良無兵を率て常陸小赴く上總武射郡少道より下總香取郡神前小至り其処ハ船小のり常陸菅前津に達し二十七日黎明水守ハ營小いたる良正貞盛来り會す良無貞盛ハ將門と和をくと戒め兵引て先つ下野小行路をへ將門とせめんとス七月廿六日將門僅

小百余騎を率ゐて社を偵ふ試に小歩兵を出して戦を挑む人馬八十餘を射殺す良兼等の軍驚き走る是時将門の生兵稍加る遂に良兼を下野の國廳に逐せまる然ども叔父と叙ちの名残憚こゝに西面の圍をとき良兼を放やる間を得て貞盛等部下千餘人と遁帰る将門此事を國廳の日記に録し本堵に帰る是より先に護が将門真樹等の罪悪を京師に訴へ々社八九月七日朝廷より左近衛番長英保純行英保氏亨自加友興三使をつかはし去年十二月廿九日の符を齎らし常陸下野下総に下して将門真樹および護等を召ば十月十七日将門ハ護等より先に京に上りまゐり罪をまつ検非違使推問して将門理ありとして事輟て究

将門記

○成田参詣記巻五

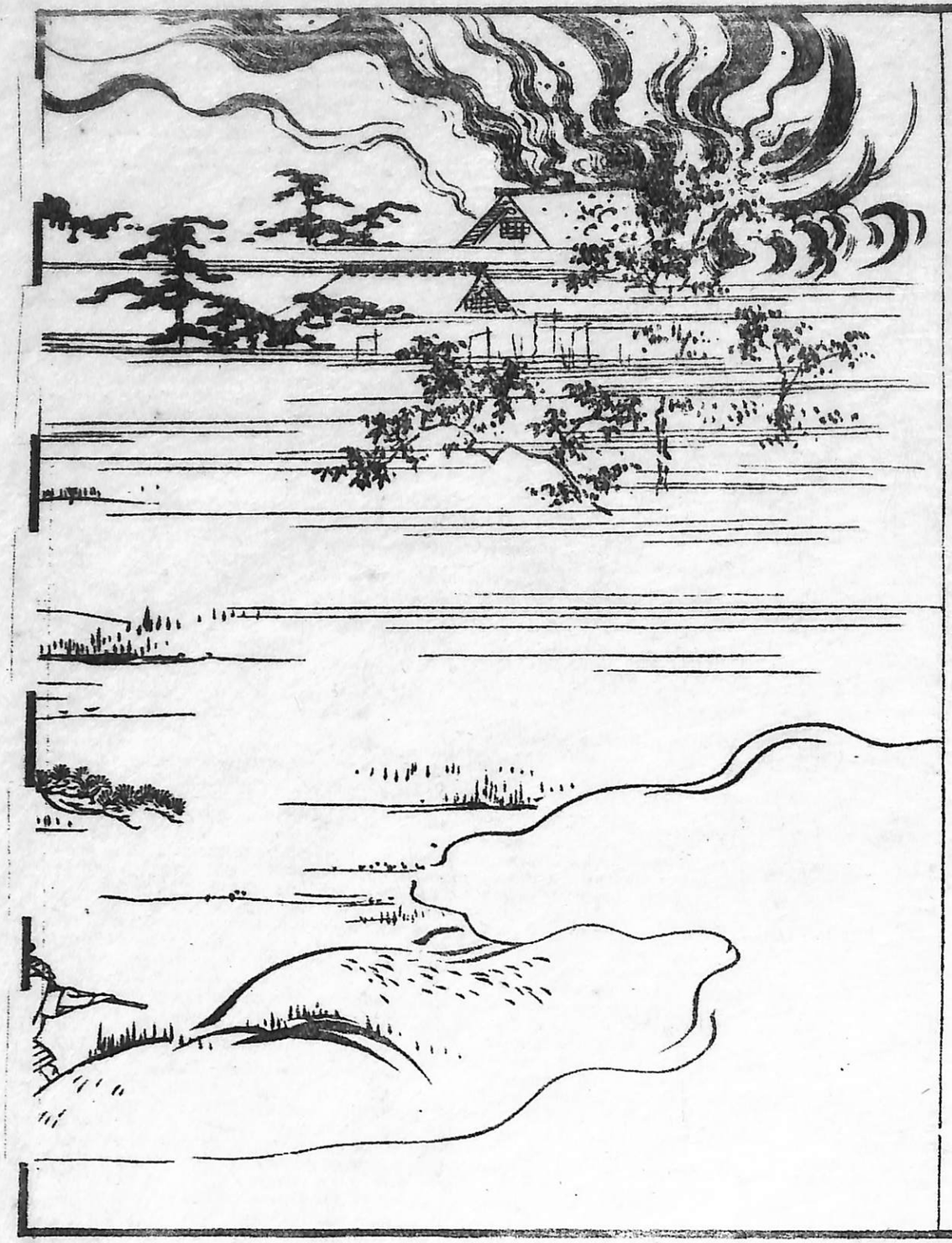
○十三

年号 天慶 七年正月 日本紀略 天皇加冠四月七日慶に改る赦を行ふ 大鏡裏書 将門も亦ゆるされて五月十一日辞して下総に帰る良兼なほ前故を御し八月六日兵を

常陸下総に畧子飼渡に出し高茂 高望 良持二人の像を画て陣前に立て進む将門視て戦ふ為て退く良兼火を縱ちて豊田郡栗栖院常羽御厩等を焼き翌日兵を引て還る十七日将門出て豊田郡堀越渡下大方郷に陣し良兼と戦ふたゝく将門脚を患へ軍大に敗る死傷算なし将門妻子を携へ幸嶋郡葦津江に逃るまた人の情しむを恐れて妻子を船に乗せ廣河に 飯沼くまと 陸閉岸に擄る十八日良兼上総に帰らんとして幸嶋を過るに又たゝく将門の妻子の舟を稜さんとすると主人の告るに遇ふて虜して上総に還る将門良兼の妻子を虜にし資財を掠奪するの罪を京に訴へ来たり 朝廷符を諸國に下し良兼を追捕せしむ然ども諸國宰司を恐れをたゝかはず九月将門の妻弟某謀りてその姉を逸す十日将門の妻遁れて豊田に帰る是月良兼事あり

て常陸に赴く十九日真壁郡服織に有り将門兵千八百を将てこれを

襲ひ宿舎を焚く良兼逆兵千餘人と筑波山ふ逃竄を將門兵を繼て大ふ搜ること數日廿三日兵を率して弓袋ゟ南路ゟ登り良兼ゟ備あるを見て兵をもつて戰ハせ人を遣して徒ゟ値しめ尋て豊田ふ歸る十一月五日　朝廷符を武蔵安房上総下野常陸等の國ふ下し良兼護貞盛公雅公連清文等にちからを戮せて將門を追捕をつかまつると命せらる時貞盛常陸大掾となる公雅公連並良兼ゟ子なり公雅下野守となる公連清文蓋武蔵安房ふの要吏たり將門聞てまた多く威勢を張り遠近を恐嚇す諸國ゟ官吏畏ゟて朝命とたこなるを猶良兼意を鋭して誅討とそうる將門の駅使子春丸と云者あり豊田郡岡崎村ゟ人なり姻家あるを以て志ゟく常陸ゟ石田莊ふ往來ゟ良兼こ様を聞て子春丸を招請ゟ事九云此方ゟ一人を遣し玉へ共ふ將門の譽中を視て告奉るへし良兼よろこんて東絹一匹とあるへく猶功ある時ハ厚く賞せん事を約す是ゟ先



将門國香を焼撃ちる圖

を将門別營と石井小講ふ子春丸乃ち諜者と共小石井小いたり留り宿
ちることと両日密小兵械府庫匿蔵密密なるし東西出馬ぶ口南北道兵の路
と指し示ぶ諜者還りて詳ふ小こ紙を告く良兼既小その要領を得て夜
小乗じて紙と襲ちんとぶ十二月十四日精兵八十餘騎とぶらび具小
方略を授けタ小發して石井小赴く亥時結城郡結城寺の門前を過ぐた
まさは将門う兵あり見てう紙を察し良兼この後小況ひ鵜鳴橋小至る
とうぶ兵疾く駈入て将門小つく時小営中兵士僅小十人のみ共に大
小驚く然う小良兼ぶ兵營を侵とうぶ既小卯の時ぶり方畧施ちと得ぶ
うにおいて将門自ら進んて歌と所る良兼う兵披靡ち十人の兵氣と潰て
轡を聯ねて進ぶたくう小甚上兵多治良利と射殺ちその餘斬殺四十餘
人餘兵とぶた逃散ぶ将門記

天慶元年正月三日子春丸の事あらてる将門こ紙と殺す是月前武蔵

守藤原維幾菅原兼茂ふ代りて常陸介ふ任ぜ外記日記政事要畧維幾ハ高望の女
婿貞盛の姑夫ふり尊卑分脈二月貞盛東山道より京ゑ赴く将門急ふ百余騎
を従ひて礼と追ふ廿九日信濃國國分寺の傍まて追つき千阿川まてふて
相戰ふ貞盛敗走て山中ふ遁まてふる将門これを捜索す礼と竟ふえ
して還る貞盛資財一失ひ幸ふて京ゑ達しつぶさふ将門う罪悪と訴ふ
六月良兼病死ふ是月貞盛符を奉して常陸ふ帰り将門の上京と俱ふ
ふさうぶ驕横まふく甚し良兼死せしハ貞盛倚ふふく陸奥守平
維扶ふ託し陸奥ふ遁れんとせしが将門ふ妨けられて終ふ果さず将門記
二年将門兵と率て武蔵ふ到り足立郡司判官代武蔵武芝と将て府ふ赴き
武蔵權守興世王ふ値ひ武蔵介源経基等と和せしめんとし酒と府衙ふ置
て相驩を此時経基なほ山北まふあり武芝の兵の後ふ者いまた和戎講
ふふる也ふらず前故と以て経基ふ詣と固む経基なほふる将門興世と

もふて武芝うたがふ己と責ふるとおもひ倉皇しての礼て京ふ入る是
ふりさき武芝と興世経基と事ふふりて相争ふ故ふ将門こ礼も和解して
己ゞ恩威と樹てんとせしふ経基逃礼去りけ礼ハ竟ふ意のふくふらぬ快
しして本郷ふ帰る三月九日経基京に入り将門興世等ゞ不軌と謀ふ
ふを訴訴ふ是ふりて京師騒動ふ廿五日太政大臣忠平公右少辨源相職
ふ命じて教書と作り詔使中宮少進多治助真ふ付し虚實と糺さしむ廿
八日教書いたる五月二日将門常陸下総下野武蔵上野五國解文とうひ
反謀實ふあらざると陳ふ十五日　朝廷使と發し宗廟社稷及ひ東海
東山両道ふ神祇ふ奉幣し天下ふ治平と祈る十六日急ふ東國の守介
以下ふ官と任ふ外記日記十五日宮中虹起る卜者兵革ふ兆るとふ　朝廷
符伐諸國ふ下たし諸社ふ奉幣してこれを祓ふ十月興世新司貞連と
姻姫して相ふふ武蔵と去て将門ふ依る常陸人藤原玄明居常貪

悪まして小民を劫奪し官租を輸せざる維幾を責む玄明あらためて維幾追捕せんとて玄明ら共を率て行方河内両郡の不動倉を穀糒と盗で妻子を伴ひ亦豊田小走り将門小侍る維幾牒を下総國并将門小移して捕送奄さを責む将門玄明とはかり維幾を攻んとて十一月廿日将門兵を遠近小徴し千餘人を率て常陸小赴き先つ書を贈て玄明と共居小還し永く追捕を免ちんと維幾さらに将門進んて維幾とたゝかひ大小こまと敗り國府と圍み遂小維幾小を虜し印鑑と奪ひ國府とやく貞盛及維幾う子為憲ともに脱走を掾藤原玄茂そむきく降る廿九日維幾定速と豊田郡鎌輪小幽ちゝ小ねひて興世将門小説て曰今夫一國と取を誅せら共八州と取も亦誅せらる誅ハ一のみ顧小安で決する ぞや将門大小喜んで曰豈たゝ八州めゝならん我京師をとらんとゝ我胄王室を距ることいまた遠うらた天位小のぼるとも可なり今の計と為ん

先つ近國の國司を印鑑を奪ひ朝官を放逐し八州を掌握して後事を
ふ一つのことを議つひに決しぬ十二月十一日将門兵數千人を率ゐ下野に
入て國廳を奪ひ印鑑を收め守藤原弘雅を逐ふ（将門記）押領使藤原秀郷
世下野小屋り大族たり往てこれを伐候ふ時に将門髪を理に秀郷のいと
るを聞て大小喜ひ髪を結ふふれよむす帽を傾てりて見ゆ接待款曲
飯を命じて共に食す飯粒前に落つ将門拾ふてこれを食ふ秀郷その
輕率を視て為ことなきを知り退きこれを計る東鑑十五日将門還て上野に
次て書を作りて忠平公に贈て曰竹生寺の舊地八聖坂のもとにありと云武芝の香華院
（小屋日記の説）

將門謹言不蒙貴誨星霜多改渴想之深造次何叙伏賜垂察恩幸往
時　朝廷以源護等訴狀下符召將門將門惶遽應召待罪使廳會遭
恩赦事得不問尋歸舊鄉安居涉日不復意有兵革之事也而前下總

介平良兼擅動干戈掩襲將門將門不得已草率禦之多受傷殺悉失資財遂至見擄略妻子矣即託下總國吏解文上言　朝廷乃下符追捕良兼等私心竊謂彼必蒙嚴譴而反良兼未就逮更遣詔使英保純行召將門將門以心甚不安不輙應命然亦付具由於純行上言以訴無罪冀復　朝廷有悟是以渴望報裁常懷怛欝去年之夏平貞盛奉符歸常陸依其國司移之下總促將門赴都將門以爲彼貞盛黨良兼者苟免追捕讒搆將門　朝廷宜糺治以加譴責也而今以彼讒訴召將門是　朝廷非受欺謾而何也是以將門又不敢應召也後及得右少辨源相職書云　朝廷以武藏介源經基告將門下推問將門之符至是將門始知負罪　朝廷已非一日之故矣適常陸人藤原玄明逃投將門請救其難將門因收玄明既爲從兵問之則曰維幾子爲憲假冒公威凌轢部下是以欲究其事乃到常陸豈料爲憲黨貞盛擅發兵庫器械以精兵三千拒之哉於是將門憤激之情不能復制破爲憲擒維幾遂取常陸國是亦維幾不教其子之罪自招其禍也是以維幾既伏其罪作書謝過其書現在豈敢矯誣是將門取常陸國固出一時憤激非故意謀逆也雖然已取一國其罪甚重寧負重罪則孰若併吞諸國之勝也是以今乃復將盡收印鑑奄有八州矣夫將門之胄出於桓武天皇距王室僅五世然則縱令永割天下之半享之豈爲非其分哉蓋以戰功取天下者史籍所載古有其人將門天與材武方今誰出其右而公家不加褒賞屢下譴責省躬多辱對人何顏抑將門少時奉名簿於太政殿下不意當相國攝政之日舉斯大事雖然豈遺前恩敢負舊主殿下其亦賜察幸甚

上野介藤原尚範ガ印鑑ヲ奪フテ府ニ入テ陣スナハチ一倡妓アリ八幡大菩薩の使者と称し衆山楊言をらく朕位を蔭子将門に授んとて汝等

樂を奏して来迎へよ将門再拜命を聞く全軍忻躍に興世玄茂等将門に
すゝめて新皇と僭稱せしむ将平諫て曰帝王の業自ら天命あり智力を以
て妄りに冀ふべきにあらず輕躁舉動恐くハそもりを後世に貽さん希く
ハ熟くこれを慮れ将門きゝて内豎伊和員經曰君爭臣あれハ不義に陷ら
す父爭子ハまこと無禮に陷らさる事成らされバ家と失ひ身と喪に同肥の言
願くハ三思を加へよ将門曰此の言を出に駟馬も及ハさる汝等吸て衆と
沮むことなかれ二人ともに退き去るこゝに相いゝて下總國亭南と京師に
擬し磯橋と山崎に擬し大井津と大津に擬し興世玄茂等宣旨をつくり
諸國守介と私に任ず将頼下野守に常羽御厩別當多治常明と上野守に
玄茂と常陸介に興世と上總介に文屋好立安房守に將文相模守に將武
伊豆守に將為下總守に其餘文武の百官を點定し内外の印を鑄新に除目
を行ふ暦日博士其人なきを是に於いて東國國司爭て京に赴き憂

貞盛秀郷等
将門が石井の
營所を燒図

享保五年刊本
今昔物語ニ見ユ

と告く将門巡検と称し更に武蔵相模に入り又其印鑑を奪ひ再び書を作り忠平公に贈り僭號の事を告ぐ相模より下総に帰る 将門記 廿二日信濃國に飛驛京に到り将門の變を つぶさに告許再三に及びければ諸公卿會議し左右馬寮兵庫寮に命じ固関使を近江伊勢美濃三國に遣はし勢多鈴鹿不破の三関を守り更に東海東山諸國に命じて其要路を塞ぐ むこまゝより先伊豫掾藤原純友西國に反せり以て将門と力を戮せんことを恐れて其應援を絶つ也

三年正月朔朝廷節會公卿の宴會を停られ楽をあげず東國變あると以て日本紀略 園太暦 東海東山山陽三道追捕凶賊使と任じ従四位上藤原忠舒東海道の追捕使となり従五位下小野維幹と東山道に遣はし正五位下小野好古山陽道に遣て共に追捕せしむ 紀略 補任 六日年例の叙位を停め使を発し伊勢に奉幣し更に天下の名神に階を加へ東西逆賊の治平を祈る

園太暦 盛衰記 七日宴會亦樂を奏せん　天皇前殿に御せを再ひ使を伊勢に遣し
東國に治平を祈る 紀畧北山抄 西宮記 将門兵五千を率ゐ常陸に赴き貞盛為憲等を
撃つ那珂久慈両郡藤原氏族等出迎て之を饗す将門命して貞盛為憲
を索めしむ已ふして貞盛扶等の妻を擒る将門之を惜て衣一襲を與
へ且歌を咏して其志を覩る歌云ふ秋風に便ふわれそとふ枝そなる
社たる花に宿る二女うつし貞盛妻云世まても花の白の義なれ我身
わびしとたもほえぬ哉扶妻云花散し我身もふらは吹風心も□□□物
なりなる 将門遂に二人を遣還し更に貞盛等を索むと旬餘竟に得ず
兵を引て下総に帰るこゝにおいて将門屢ゝ諸國に徵兵戎敵遣
し留るところ僅に千人に満たず十一日 将門記 朝廷使を発し符を東海東山
の二道に下し募る不次の賞を以てす廿二日 僧正浄蔵に詔して大威德法を
延暦寺首楞嚴院に修せしむ二月朔こゝより先貞盛将門の兵士を敵遣

せと聞て秀郷と議して兵四千餘を下総下野の界に出し将門を攻んと
す将門之を聞て大に驚き是日手兵を率て急に下野に赴く将門自
ら將たり前に有り玄茂備副将軍として後に有り經明遂高等こゝに屬
兵将門貞盛等の在ところを尋ね經明等たゝく山に登りて貞盛秀郷
の軍を瞰む山北に有り經明勇を負て謀ふ獨進んで秀郷に
戰必勝我に有り慎て反顧せるこゝふ社兵士殊死して戰ふ将門ほゝん
と敗れんとす日既暮るに會ぬ将門逡巡して退く 将門記 八日　天皇紫震
殿に御して節刀を征東大将軍藤原忠文に授け東海東山に兵を將く将
門を討せしむ 紀畧 刑部大輔藤原忠舒副将軍となる 将門記 右京亮藤原國衡

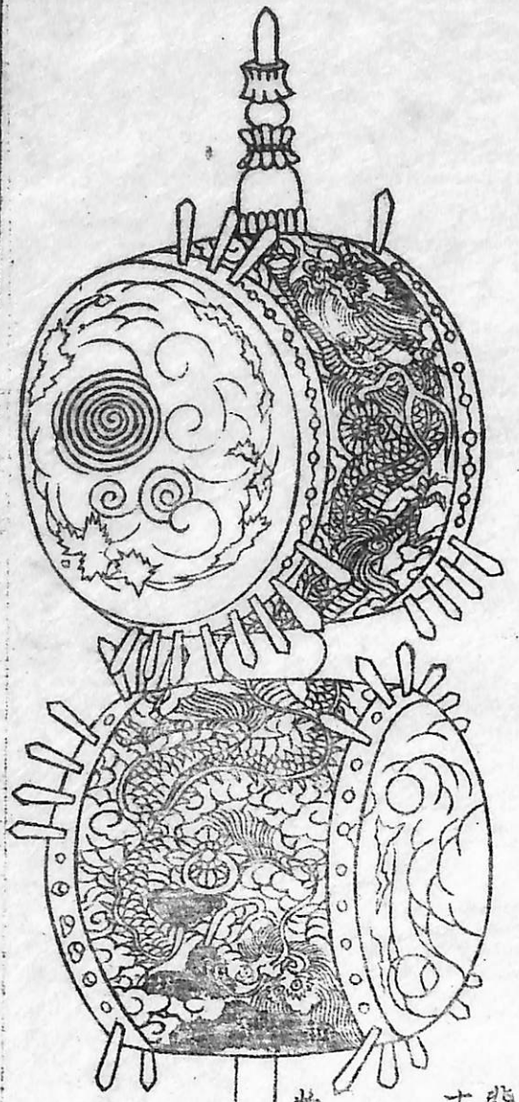
大監物平清基散位源就國源經基等ニ從ヒ屬シテ東ニ十三日貞盛秀郷生兵ヲ調加シ將門ヲ下總ニモトム將門手兵四百餘ヲ隨ヘ幸嶋廣江ヲ渡テ敵ヲ禦ラントス貞盛秀郷ト共ニ兵ヲ進テ偽宮ヲ燒ク無社ヲモヒキタル將門ヲ所在ヲ尋ス十四日將門道ヲ轉テ幸嶋郡北山ヲ往キ衆兵ノ會ヲ待ツ貞盛等ニ從ヒ採リ細ヲ兵ヲ率ヒ起キ攻ム晡時兩軍セマリ合フ是日南風ヲ吹ハタ急ナリ將門ノ軍南ニアリ盾ヲ前ヲ倒レ貞盛等ヲ軍北ニアリ盾皆北ヲ倒ル兩軍次ヲ乱シテ酣戰ス貞盛ノ中軍死セル者八十餘人將門ヲ兵纏ヒ聯ネテ衝突ス茲ニヲイテ貞盛秀郷ヲ憑ム兵逃ル者二千九百人餘ル僅ニ三百餘人風ヲ乘ル社ハ貞盛秀郷風ヲ隨テ進ム戰フ將門馬ヲ馳テ奮鬪ス馬ヲ乘ル風ヲ忌テ駐ス將門記 貞盛射テ將門ノ額ヲ洞中ニ將門馬ヲ轉ス秀郷其ノ首ヲ斬ル是日將門ノ黨死スル者百九十七人大刀五ヲ楯三百枚ヲ

○成田參詣記卷五

○廿三

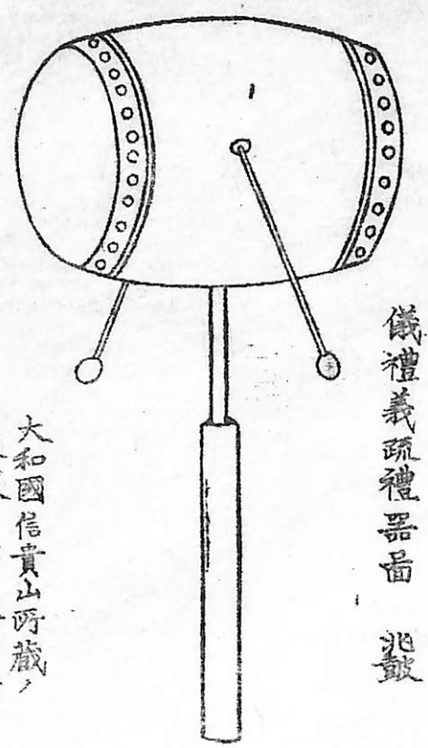
將門記鉦 自註鉦者兵鼓也諺云布利豆々美也

當時軍器ノ鉦ノ制詳ナラス姑見ルトコロノ樂器ノ畠ヲ載セテ考古ノ一端ニ備フ



嚴島畠會ニ載スル図 鼓

胴金地極彩色皮金地古色ニシテ詳ナラス



儀禮義疏禮器畠 鼓

大和國信貴山所藏ノ鼓ノ畠モ大同小異ナリ

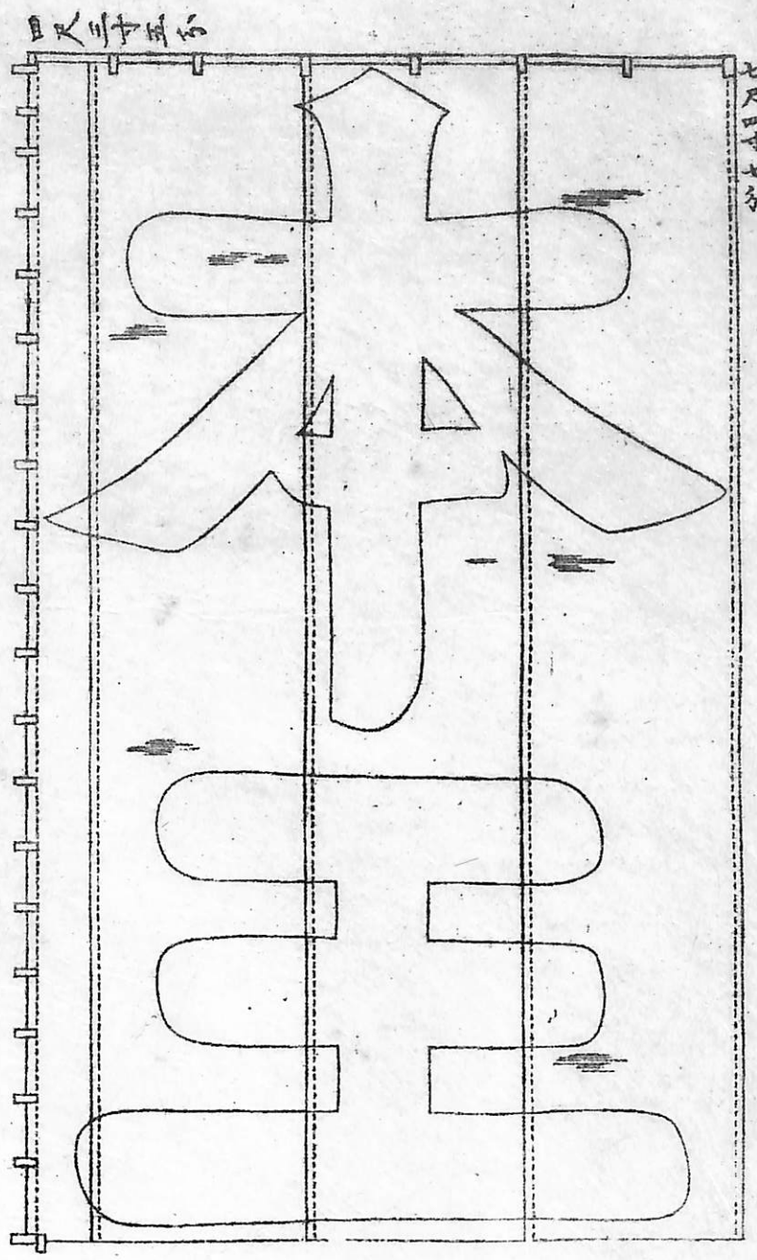
總長一尺二寸九分

柄ノアマリ五寸五分上下ミナ竹ナリ

結城郡尾崎村倉本氏所蔵将門旗 尾崎ハ将門記の岡崎ちう子春丸ハ此地の人ニ将門ハ由緒あり

絹地両面朱カキ文字白地ナリ竪乳十八横八下一麻布イヤウナルモノ 春村云古代持物旗ノ類皆左リ乳ナリト云

七尺四寸七分



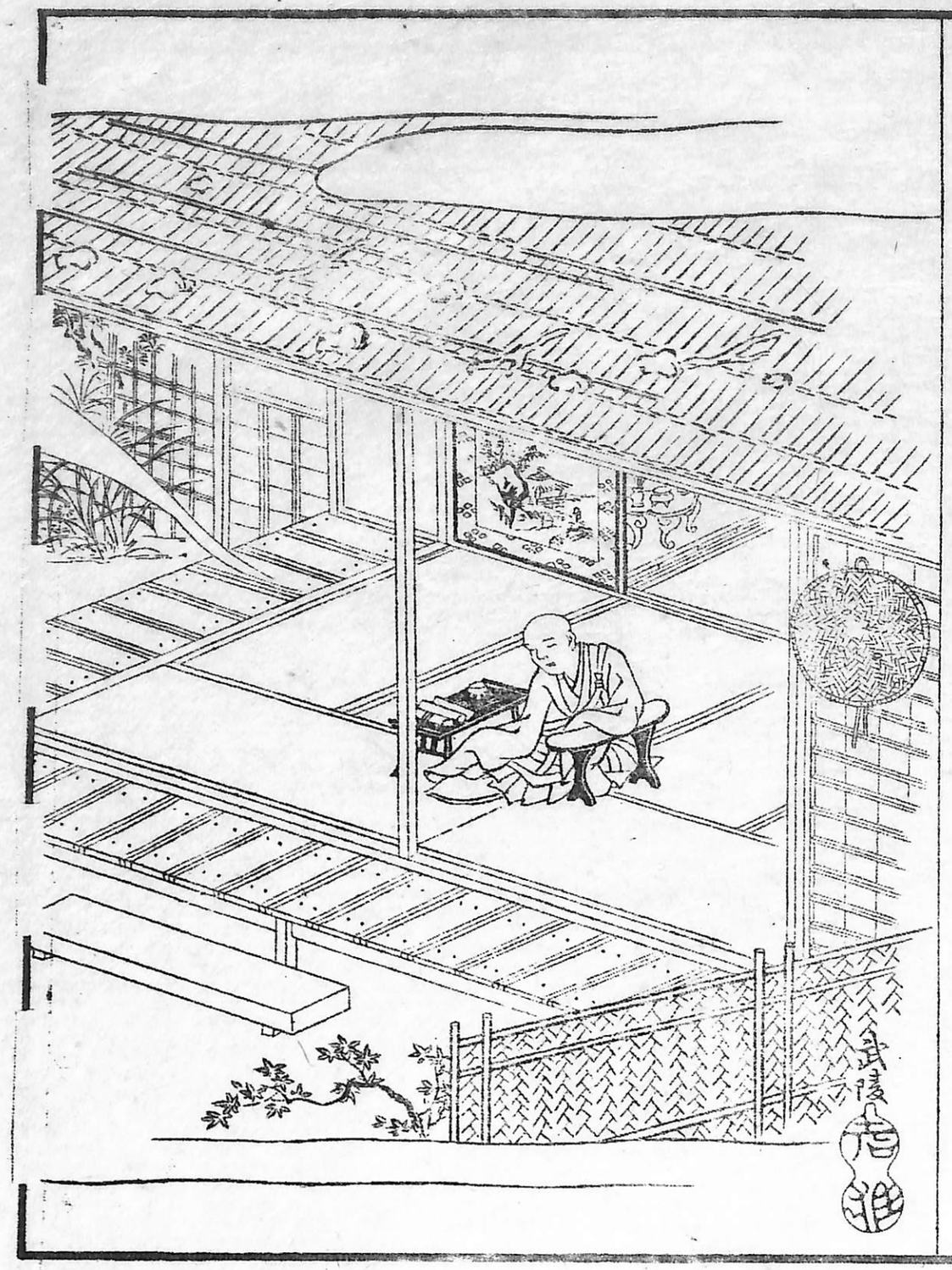
色川三中云将門ノモノニテハナク朝廷ノ御身方ノ人ノモノナルベシ将門記ニモ本皇本天皇ナト朱雀天皇ヲサシ記サレタリト云ク

及胡籙百九十九具を獲てう十五日維幾定遠常陸ハ帰る十六日 朝廷再ひ符を諸國ハ下し募るハ重賞を以て将門を討す十九日公雅興世と上総ハ斬る 一代要記紀畧 廿五日 朝廷仁王會と綾綺殿ハ修し更ハ僧徒と京城諸門ハ分遣そし講を修し賊党を滅すると行る信濃國ハ飛騨京師ハいたり去十三日貞盛秀郷等将門と幸島ハ謀ることと告く畧是月忠文関東に到り命して餘賊を追捕ス将頼玄茂と相模ハ逐ハ玄明と常陸ハきる三月五日秀郷ハ使京にいたり将門誅に伏せると告く九日朝廷功を論し賞と行ふ秀郷の功第一なる故以て従四位下に叙し功田を賜ひ貞盛を正五位上ハ叙ス四月八日忠舒公連押領使とたり下総ハ入り将門の残党を治めしむ於是東國悉く平く廿五日秀郷の使将門の頭を齎らし京師ハいたる 将門記 検非違使こ裔を大路ハ徇へて遂ハ獄門ハ梟ス 上諸書を参取して其要を摘む原書漢文なれども徳路の続日本後紀ハ今様の假字文なりして雖而と一ツ書 ○或云将門純友此春山城に登りて平安城

と直下に密に逆意と相法ひしとつゝて或ハ貞盛京師えて將門を誅反せんとと察してこゝを
伐撃んと思ひつゝ終に果さゝ當時の巷説街説あるゝと好事のものゝ物に
も記したりと思ふ〇一説平八年春二月權守興世王介源經基朝臣と足立郡司判官代武蔵
睦とゝり結ふて云ふ武蔵の後陣設なく經基の管所と圍しハ經基ゝ
事の趣を奏せしハ將門まゝ一層の罪とせ申し遣ハ將門を亦武勇をたのゝて
小説反とせゝあ行ハ將門を亦武勇をたのゝて東國殘りなく御掌に集
して京師まて攻のぼらんと云ふ將門追捕宣旨忽ちに
朝臣を副て終に大功を立てゝ以ふ武蔵の逆
人ゝてその人ゝゝ親敵に与たるもあらんも〇果して事と違ふ
と思志あらんに八後の軍功もなのもしゝゝ將門新皇の術為狂人に寄し
ありいそでその為体を傳聞たらんに世に傳ふ是ゝ
世ふゝゝ小是ゝゝ下総ゝ逃ゝて
ゝゝ新皇と僭称せゝ以前ゝ俗説の妄言なり〇四年秋四月百官と云ハ將門
官と置し時に官名ゝ俗説の妄言なり古事談に將門逆乱者天慶二年十月始披露ゝ
大臣以下文武百官皆以忘宣ゝ此文と見れハ將門を置しハ悉く朝廷の官号と用ひたるゝ
○水雲先生云藩翰譜相馬家條に家系將門より出し見えたれと將門ハ謀反して誅に伏し
めをハ子孫の有べき謂なし此ハ舎弟に大葦原四郎將平より出し岩陸信太の地方と風
土記に大葦原と記ゝ八信太に小太郎山因あり且將門記に將平其事の成ゝを先見して將
門と強諫に後將門諸弟を叙任ゝ小將平の名見えゝ八逐に偽命を受ゝ
人の後宗ゝ〇將門ハ岩井ゝ
國王の神社あり上岩井の鎮ゝ朱印の地拾石と寄ゝ八月十四日の祭ゝあり但し將

○戊田参詣記巻五　○廿五

門の諱ゝ祀し八二月十四日なり月八遠ゝも同日あり祝官と飯塚某と称ゝ
も墓地と寄ゝ八原ゝ
山ゝ又岩井に鳴と云地あり所謂鳴渡山ゝ
業師如来に傷と妻ゝ將門ゝ
八ゝ貞盛八伊達家臣秋保家品小天元五年三月十九日
年年七十五秀郷八佐野家系譜ゝ七十六備ゝ
○三縁山志巻九第九世麿遵社道譽上人貞把和尚姓八大岩氏畠山の麓下ゝ
和泉國日根郡鳥取庄陂宇牛村の人父八刑部丞母八青木氏ゝ永正十二亥
辛九月廿八日誕生大永七亥年三月十三日十三歳ゝして同庄寶圓寺貞迎
上人ゝ投ゝ羅漢ゝ性魯鈍ゝして道心甚深ゝ十七歳の時享禄四卯年
二月関東の高風とゝやゝ錫を飛し敵路の中とゝのゝ長亭ゝ月を歩
し武蔵國小下り三縁山ゝいたり修学せんとゝ果業公是と許ゝ学修り
行精ゝして晝夜道教を聞て九年の星霜を経て後故郷ゝ帰省ゝ師の命に
ゝて講筵をひらく其説場ゝ
座より座つ聴衆觀て大ゝ嘲り笑ふ茲ゝ
門ゝ辞ゝ及び再ひ



東関ハいたり昼夜怠くとして貫練精修を一朝下総國成田不動尊ハ詣て
懇祈をすること三七日明王假寐に託し現形し両手に利鈍の二剣と提げ示
して曰汝将ハ何社を呑んとをもうや師の云利剣を呑んと明王利剣を授
ひ師の喉と裂破し即血を吐く事升餘ありて甦れとも身に痛悩を覺
えず（今能澤山ハ能血の法衣あり成田山開帳の時ハこれを結縁せしむ世ハ事と祐天
と記り傳たり三縁山志巻十ハ祐天大和尚ハ師人となり権直敦厚剛宇世を覆ひ
精人と兼ねく又漸著聞集巻五祐天傳ハ年十三保山池法院ハ休波を師とし休波ハ能を
愛し山の名匠檀道上人ハ付く上人其オを貴ひ遂ハ薙髪せしめて祐天と名つくることを見ゆ
れハ少年より才氣顕れしるべし然るに其不靈を欲を祈しと云ハ誤なるべし但し祐天寺
の額ハ此事ことを傳記ハにも往と載られと惟なる書ハ見えたと或人ハ云う祐天名ハ愚忠顕尊
と号ハ享保三年七月十三日寂）　をもうに日々數万言を暗誦し顕密ハ通して内外と渉閲
し後祖洞上人ハ随ひ受法遺事なしかつく武蔵國ハ机庄泉谷寺に弘化
の時杖と以て地と穿ち子松一株を樹其時誓願をらく我法もし行運の
栄えあらはこの松栄ゆべし我法ハ衰しおとろくハ此松枯ゆべしうらをと然る
ハ此松年月を逐て枝葉四方ハ布て一町餘ハいたる邑人負把松と云そ

道譽上人夢中に利劍を呑の圖

大嚴寺所蔵道譽上人遺衣 俗ニ鈍血ノ衣トス 同常服

裏ノ図 羅色紫

浅黄絹

絹色紫

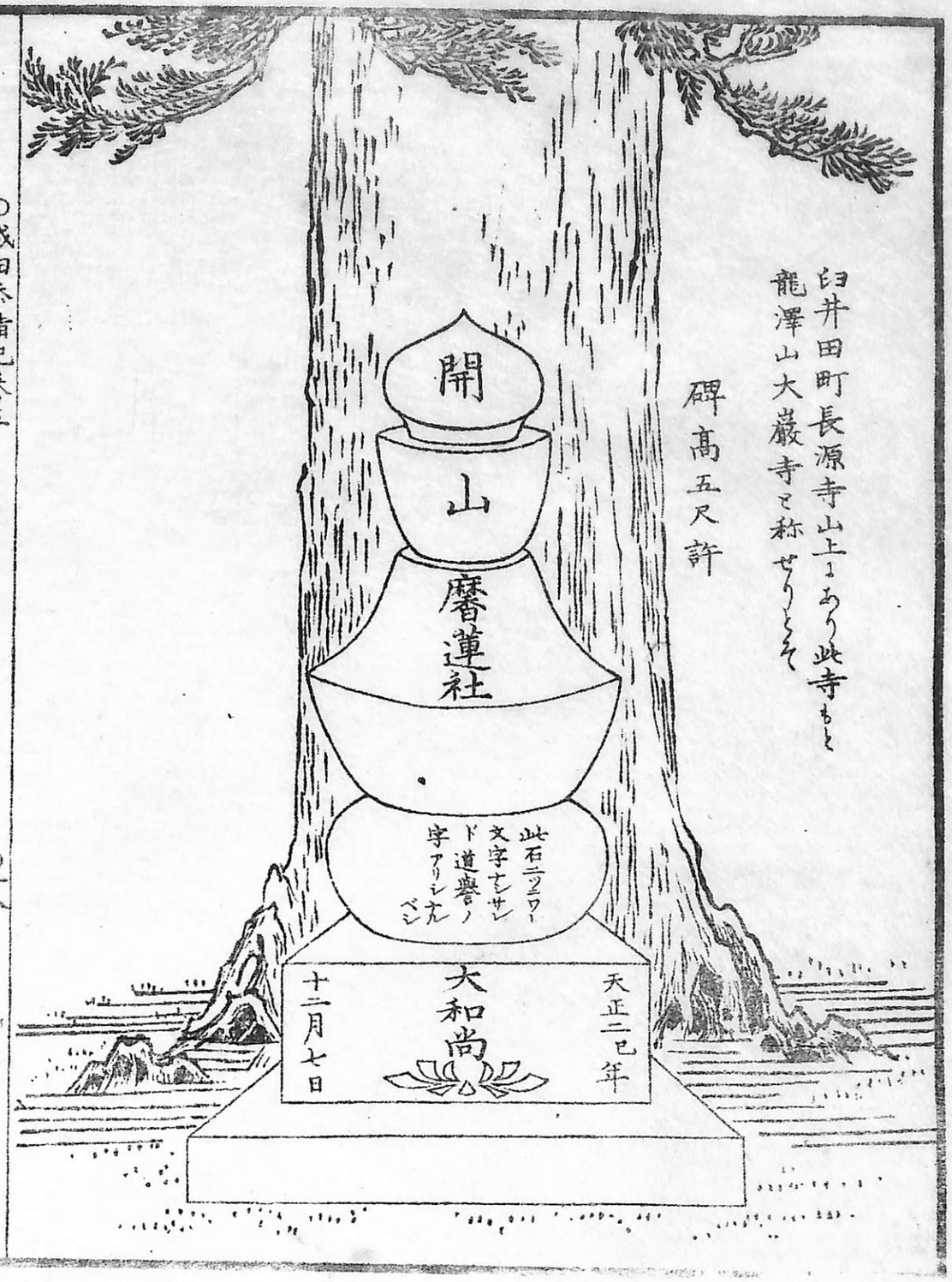
新勝寺所蔵名号 一尺九寸一分

南無阿弥陀仏道譽

外ノ4月

臼井田町長源寺山上にあり此寺もと
龍澤山大巖寺と称せりとそ

碑高五尺許



の下毎に風あり人皆こゝを異とせり宝暦年中此松由ありしを以て臼井田村の庫裏焼燼せり　天文中下総國千葉郡生實に移り龍澤山に水中に入り座念すること三七日阿弥陀佛金光を放ち室中に現てつぶさに一家の玄頤をそゝぐけ給ふこゝに於て師を以て傳法の中興とせし時に龍神此瑞に驚き出現して此所に住することを數千歳いまたかつてこゝに寄遇と見る伏願ハ上人大悲を以て浄家の妙音をさつけたまへいふ師是を許諾し宗戒の二法をさつけ龍澤善女と称し善女受戒の禮謝して云和尚哀愍の恩に我苦域を出慈恩渤澥よりも深し正に何を以て此を謝せん是に於て師龍女に謂て云ふ此伽藍を此所に起立せんと欲ス汝此地を去にのたまふ此弘法の洪基をもつて龍女承諾し澤沼を委付し吾この為に唐池を除貽せバ残軀を留め永劫外護ならんと幸に其澤沼を塡塞精舍をたて大巖寺と名く原式部少輔極越として費用を資成す是より浄宗煽んに興りて

大巖寺本堂所安道譽上人木像

同寺所蔵道譽上人鉦

源家重何人ナリヤ詳カナラス

義虎六七百群居ス今猶小渚あり尋常水八池の半小湛え毎年加行傳法中
八靈水池上小湧騰る事三尺餘加行終世ハ又平日ニ於ハ是ニ於龍女新受
法ニ徒小供そるなり平日師祥名尤多し池水を掬て呪て燈油〻〻又
念佛小障るとこさらひ群蛙喧嘩を止めしむ弘治元卯年七月墨書を文
啓上人小承襲し縁山第九世となる永禄六亥年又生實小歸住し當國
臼井村小ゑり長源寺を創立し幽居ス天正二戌年十二月高僧傳ハ七日九月一云
西小向ひ合掌し佛ニ来迎を感して寂滅ス世寿六十法臘四十八遺骸
と龍澤山小埋葬ス

○二王門　本堂　經蔵
三重塔　御供水所　鐘楼
御手洗井　寶庫
本坊　遍照院　南光坊

正福院　延命院本尊地蔵なり元堂小ありて業師の別當と勤め日蓮山と称ス
奥院不動の本地大日なり元本堂の後ニ方小ありしを今ニ地小移し
金剛胎蔵両界ニ銅像を勸請ス毎年六月八日小戸と開て参詣を許ス
額堂　石鳥居　光明堂
大師堂　観音堂又院とも称ス今の飯田屋駿河屋蕎屋中ニ居地甚田址と云ふ
阿弥陀堂堂内小古き十王あり今新小漆なほし〻たれハ亡
今も主畑と寺の地あり社古きとく見ゆ　藥師堂
地主妙見社　白山社　疱瘡神社　秋葉社
金毘羅社　清瀧權現社相殿妙見社
辨財天社　聖天社　稲荷社　天神社
浅間社
社蔵小古面あり銅官と宮崎某と云ふ此社の本地佛の業師八座像なり巨偉なり此堂もと
郷ニ小ありしと成田へ移し其後今ニ地へ移せり○三の宮藥師不動ニ三尊の備社あり此
講中の帳八至て古き　天神社牛天神と称
物なりと云ふ　此地名を牛伯
と称せり古き勸請と見えたり

仁王門所掲

東叡別當兼華厳院長吏兼門主
大僧正道如書

本国内

本坊所掲

前智積僧正尊戒
書

神護新修寺

額堂所掲

文政九年丙戌九月深川平清

文晁筆

鐘識

奉建立成田山不動尊前安鐘之事
天長地久御願円満
伽藍安穏佛法増長
庄内元亨国土安全

○成田参詣記卷五

○三十一

御中餘昌万民牧樂
十方旦那現世悉地
神譜新勝寺
二十時寛永十六年己酉九月廿八日
住侶法印照禅
大工賴澤形部太夫信泰

本堂前銅燈籠識
照範住持ノ時諸堂再建当寺中興トス享保九年十月十九日寂ス

伽藍安穏
人法繁昌
正徳六丙申大
不動明王御寶前
二月二十八日
国家安泰
萬民豊饒

願主成田山中興
銅燈籠一基
現住沙門照範

○周文羅漢圖　竪三尺七寸 横一尺九寸　麻布坂下町　某氏寄附

○小烏丸太刀　柏屋重次郎寄附

○牧溪画二幅　埴生郡　某氏寄附

○神寶天國玉寶劍當寺第一の霊寶なり先小峯たる平將門調伏のため朱雀天皇より賜ふところと云傳たれと容易ふんることを許さ社ハ洩しつその外猶種々の佛像霊寶古書画お數多け社と限りもなけ社ハ其一二を擧く

寶永中稲葉侯ヨリ所寄

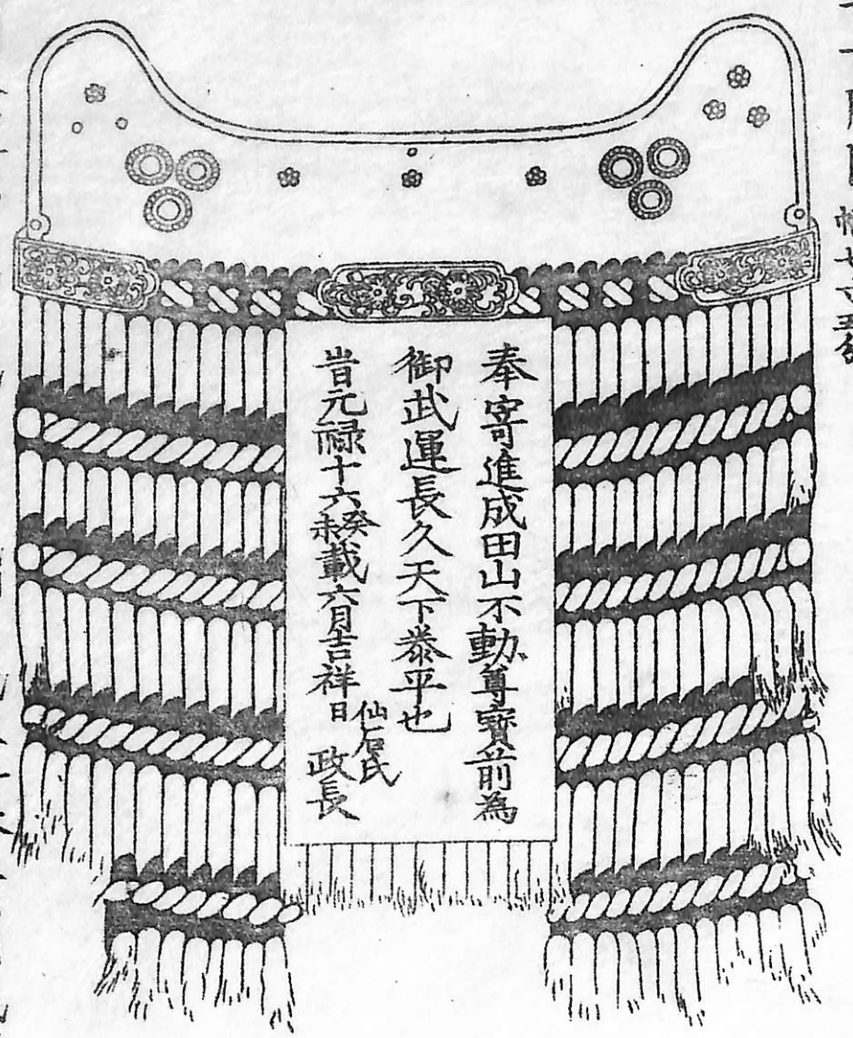
稲荷木像 惣長八寸許

此時寺領五十石と寄附せらる
今も稲葉侯ら〻
年〻代参の使者
あり

石燈籠

宝永元甲申年九月吉日
稲葉四郎左衛門尉越智宿祢義通
稲葉大右衛門尉越智宿祢長通

仙石氏所寄古胴圖 堅八寸八分 幅七寸五分



裏面四ノ如キ識アリ

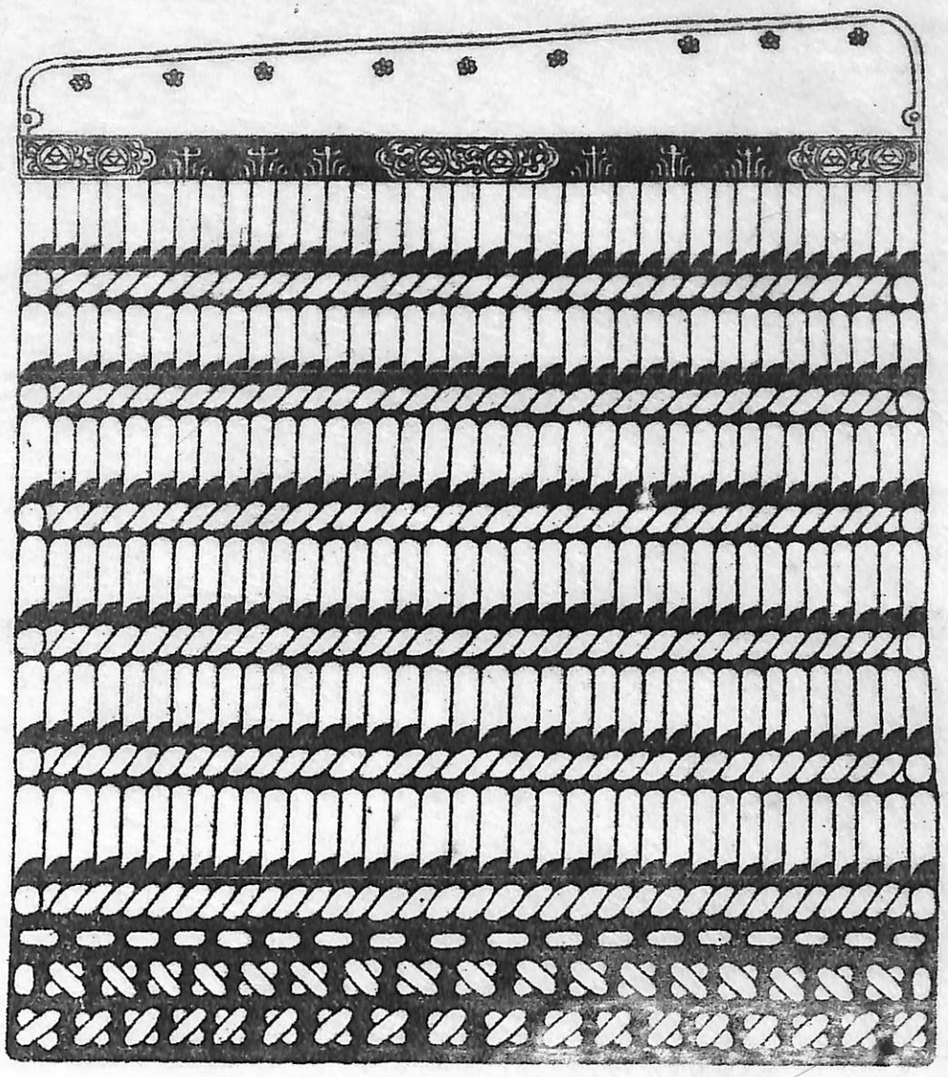
為義十二男 賀茂冠者 義次

諸家大系圖巻四清和系図為義ノ十二男ニ義嗣アリ武家評林大系図義次淡路國ニテ戦死ストアリ

某氏所寄不動古面（かどうこのん）　長八寸六分　横六寸二分

歌迎不動ノ面ナリ　假面譜ニ元休滿總トヲ人アリ宝暦八年死スト此人ニヤ

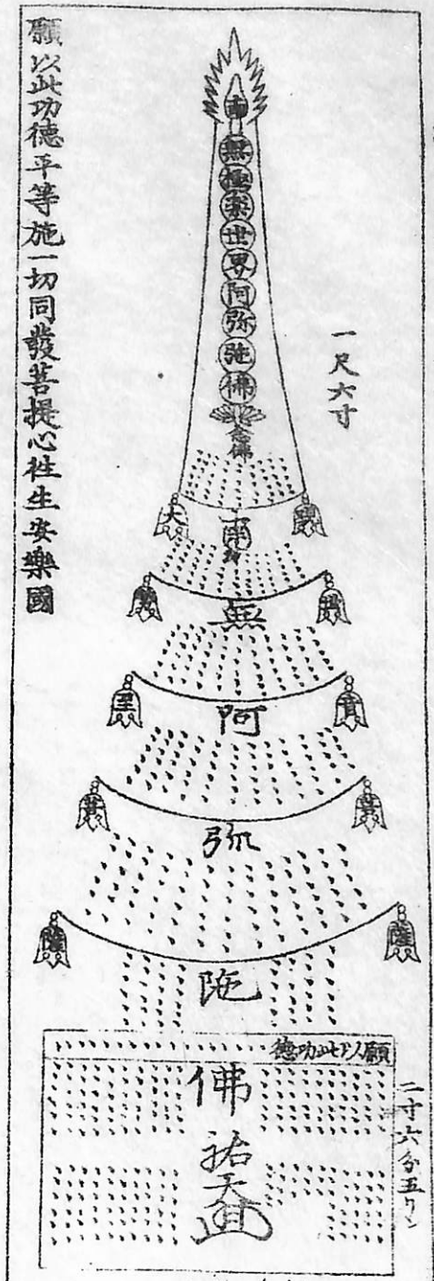
同袖　竪一尺二寸　幅一尺五分



祐天上人百遍名号

細点八原書六字名号ナリ

願以此功徳平等施一切同發菩提心往生安樂國



此歌圓光大師傳記ノ中ニハ見エサレトモ玉林和歌集巻三ニ載テ如来源空上人ニ告サ給ヒケルトナント了誉法師ノ後書ニ見エタリ

圓光大師不焚名号真図

只タ頼メヨロツノ罪ヲ深クモ
南無阿旃陁佛源空五
ワカ本ノアラン限リハ

○成田参詣記巻五

○三十四

大石氏所寄念珠箱識（おおいしうじ　ねんじゅ　はこ）

武蔵北野郷ニ大石源左門トヲ家アリ天文比ノ文書アリ此家ヨリ寄セシ此家ハ木曽義仲ノ子孫ニテ大石源三氏脈其養子トナルト云

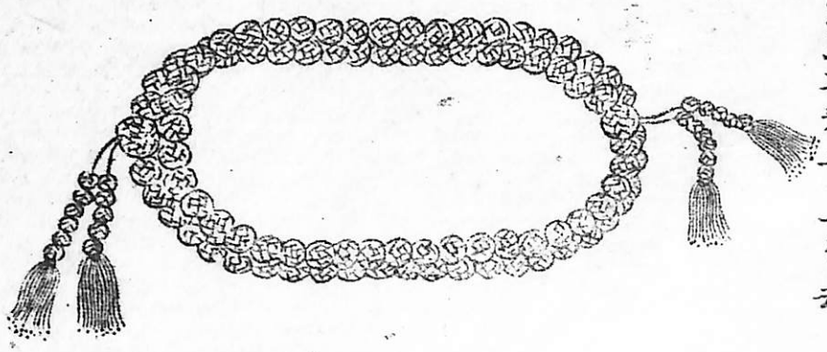
弘法大師御作模

籠數珠　一連

奉寄附竹珠念珠一連

爲紅月圓翁居士出離生死也

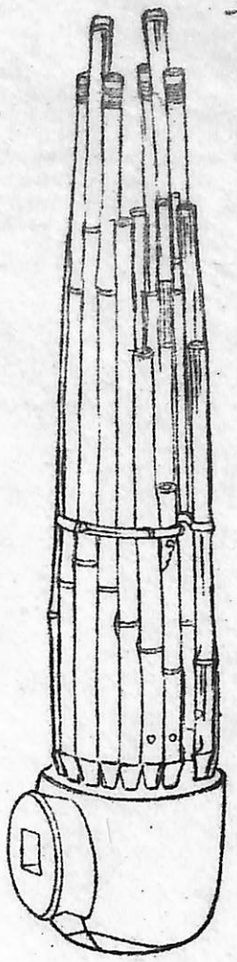
元禄十五庚午天五月廿八日　孝子大石又内施与之



七寸八分五厘

或ヲ浅野内匠頭長矩ノ幼名ヲ又市トヲ又正保二年武鑑ノカキ入ニ大石喜内トヲ人アリト此彼チガヒアルヤウナレトモ此又内トヲノ何人ニヤ詳ナラス

笙



管の藏　便于遊則像之形樣雖異非好奇也自　名一世

享保十四年九月吉日　且谷正穂造

笛

九鼻丸と箱ゟ題ゟ長一尺三寸二分徑八分

古碑の圖

奥院の額字覺皇とハ大日とゝつり

建武三年二月廿九日
延元ト改元アリ

此碑奥の院ゟ石垣となり有
左の方入口ゟ立り
道禪何人なりや
考へゟ外左の方
ハッゟり文字ゟ
ひへゟも知れさる
もなり

水雲先生云延元元年五月八高氏兵庫に戰て楠正成戰死の月なり八月廿六日
より推ゟ八百ゟ日前八五月十四五日に死せ一人と見四郎八也し甚時の戰ふいあらさるゟ

延元の号を用ひ八南朝忠臣の後ふるとて称ふ

こゝ備中福山大江田式部大輔氏経直義と合戦ハ櫻雲記五月八日顕家攻那須云

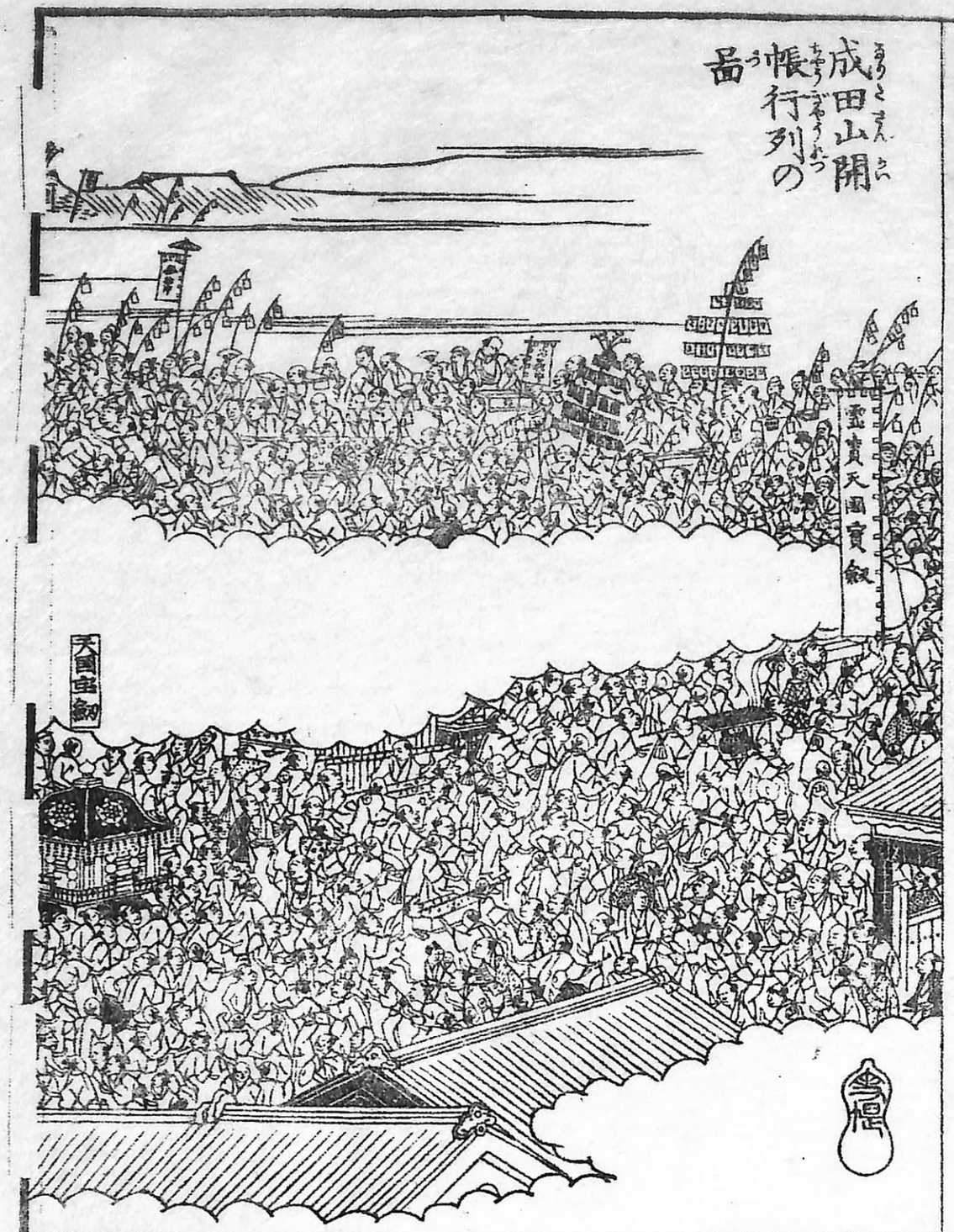
陵川合戦ハ梅松論太平記共ニ五月廿五日之又太平記五月十五六日の

此碑奥院乃右の方ニあり

外右方ニ五ツあり

自ラノ石塔ヲ作ルナルカ

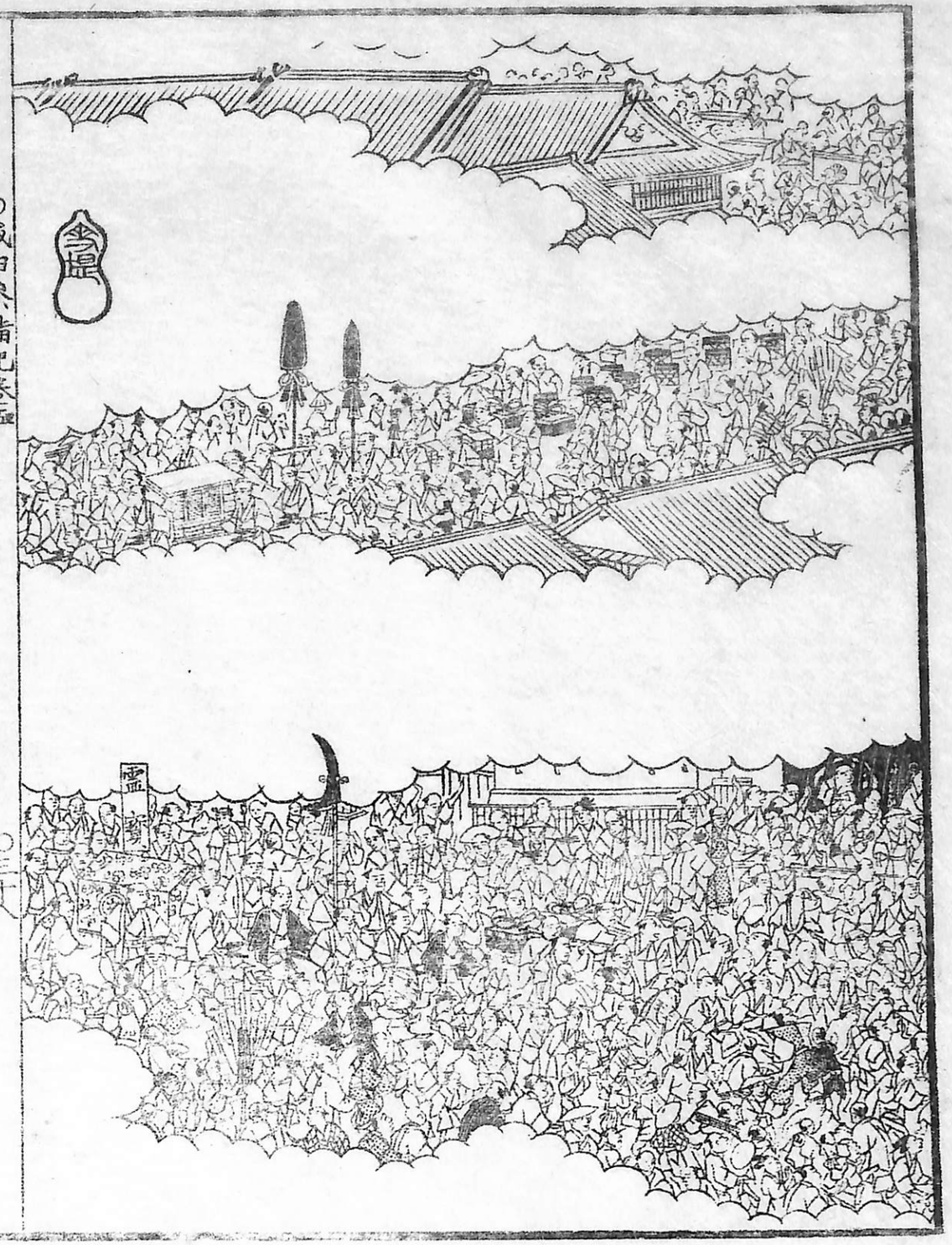
成田山開帳行列の図



開帳實暦元年
平井燈明寺。同
深川永代寺。寛永
二年。寛政元年
。文化三年。同
。文政四年。天保
四年。同十三年。
安政三年共永代寺

其二

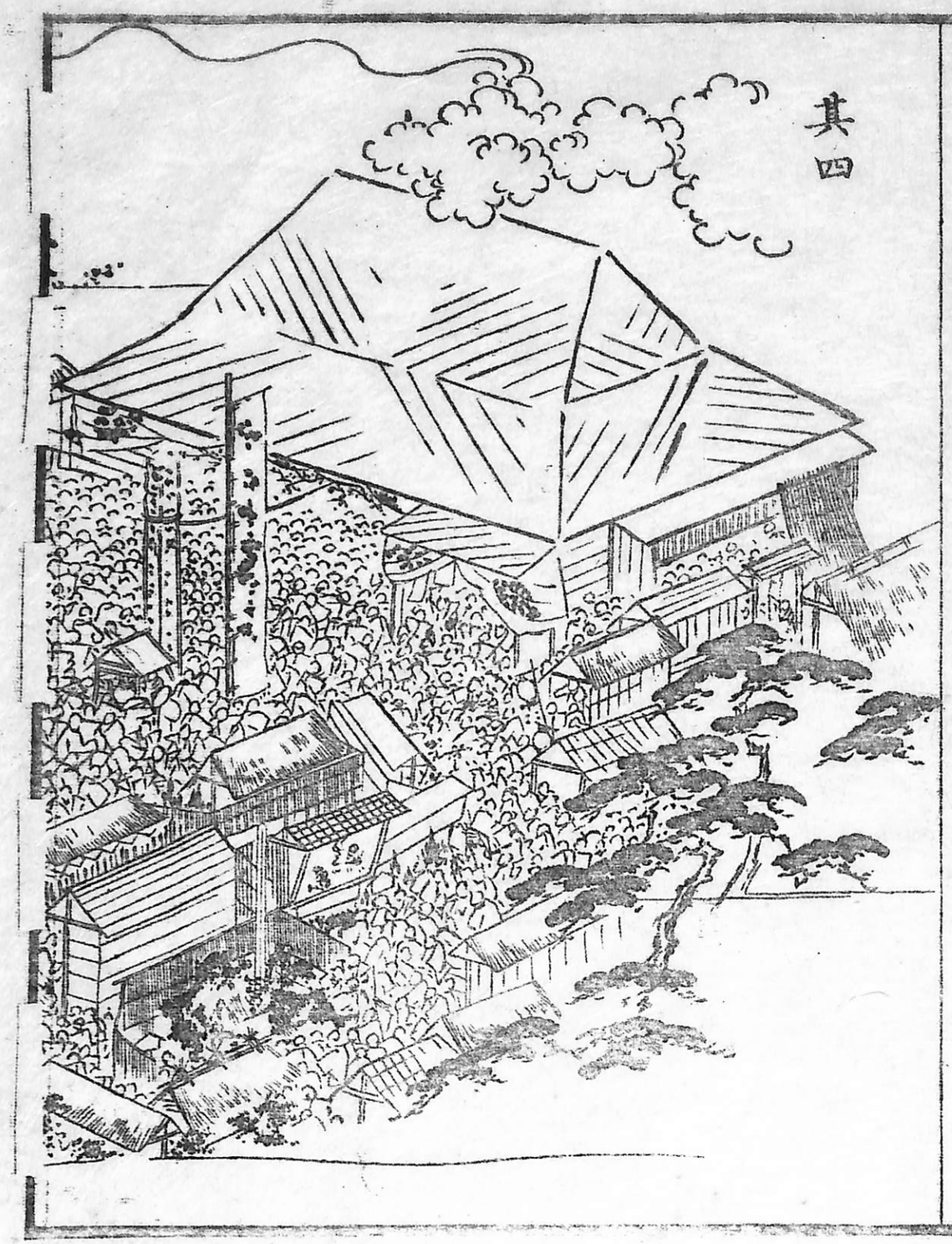
深川八幡ニテ開扉ノ
路次ノ次第成田ヨリ
舟橋新宿ヲ往何レも通
江戸ニ入リ新吉原大門前
浅草八幡同所伊勢屋
四郎兵衛駿河町三井
絲店共ニ小林アリソノ
永代寺ヘ旅宿也

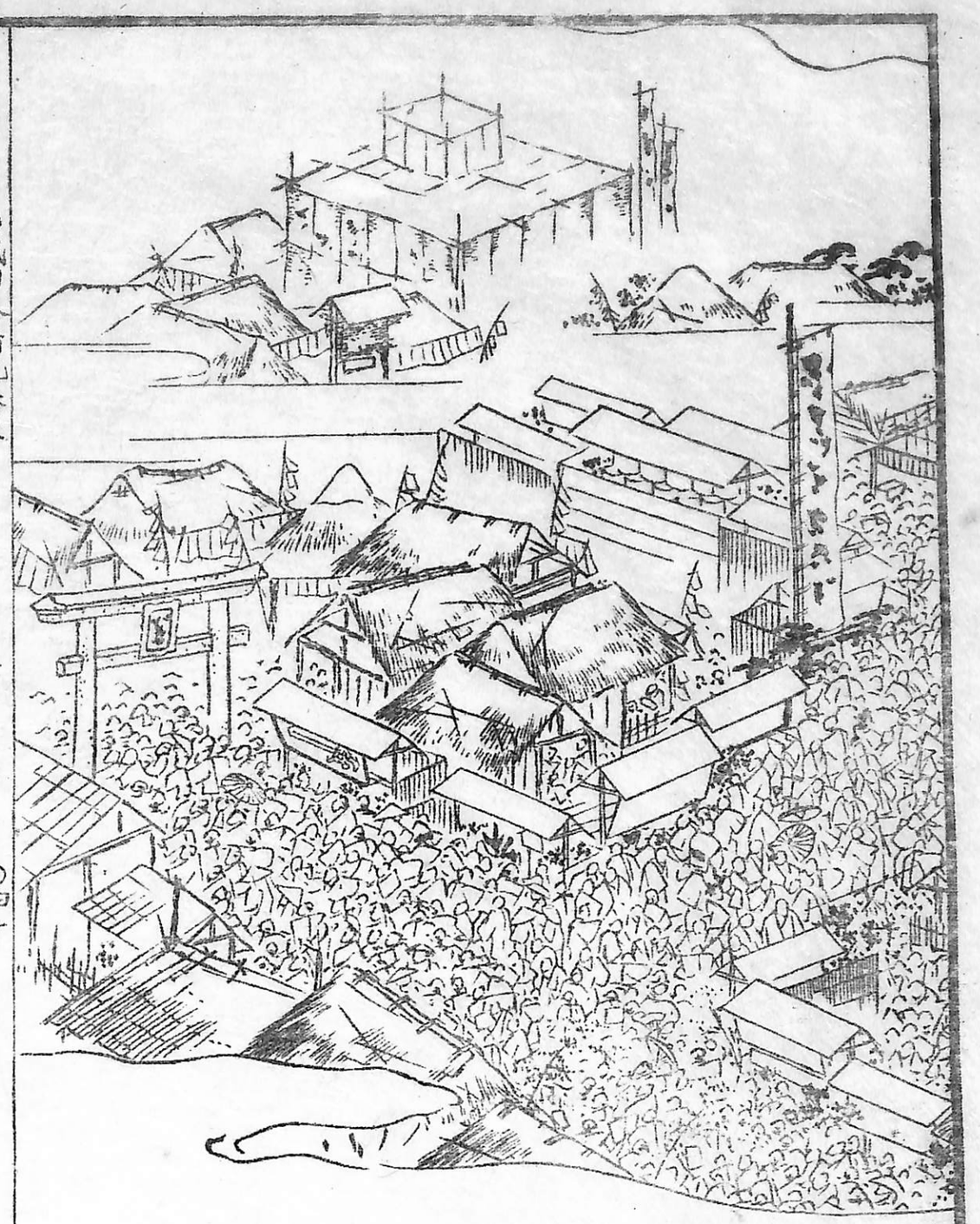


其三

家集
むさしのくさもみな花を
君つとふ處女子の袖の
いろとそみれ

建長


其四



○手長ハ伊能穎則云江次第二 大臣大饗条 居餛飩朱器云々大納言中納言参議辯等手長隨位階用地下五位尊者主人手長云々羞立作物主人並尊者陪膳役送辯 或殿上四位 大納言陪膳等或用殿上五位或大中納言以下手長役送用地下五位ト見ゆ 大臣大饗ハ大臣小任せらるゝ人公卿と我部小輔て饗と行ふなり餛飩ハ菓子なり手長とハ今の給仕人とゝ云ふなり大納言ハ大臣の為ハ手長とつとめらるゝなり隨位階ハ饗を行ふなり大臣位階卑名称地下五位と手長ハつとめらるゝなり尊者とハ招客の中ハ官位共ハ高き者陪膳の人と云へり今ハ上客なり其給仕ハ亭主自らたとめらるゝ羞立作物ハ魚菜ハ料理なり陪膳役送ハ料理を盛れる器皿を席上まて待運ひ膳を居るまての役なり手長ハ飯汁を盛替て進る給仕人まて陪膳とハ別なり大納言ハ陪膳殿上五位なれハ手長まてつとめ地下五位なれハ手長まてと兼つとむるなり是今の市手長ハ濫觴なるへしと云り

小野忠明墓寺臺村永興寺域中にあり 貞享年中鐘識に寺臺郷保目山永興寺忠明即神子上典膳なりと云

○武藝小傳に神子上典膳其先伊勢人也仕上総萬喜城主土岐頼定弱冠好刀槍術會伊豆人伊藤景久一刀齋到上総典膳遂從遊諸國景久弟子有善鬼者亦得精妙然景久常欲害之謂典膳曰汝殺善鬼然我恐汝不勝因授其靈刀誘善鬼到総州相馬郡小金原近邊景久謂二人曰我自少好此術遍遊諸州無勝我者吾願足矣今欲以寶剖瓶刀授汝等然一刀不可授二人汝等試優劣於此優者我與之善鬼大喜与典膳決勝負典膳遂殺善鬼景久以宝剖瓶刀與典膳而去相馬郡善鬼塚今猶存爲世人呼曰善鬼松典膳後仕 幕府慶長五年戦於信濃真田有七槍之譽後冐外祖氏称小野二郎右衛門食三百石 今濱町小野氏高八百石

小野忠明夫妻木像 永興寺所安

丈一尺三寸許

同寺小野氏の墓碣に清海院日岸居士寛文五乙巳年十二月六日了右側に先祖大和國之城主十市兵部頭末孫子忠明公二代俗名小野次郎左衛門左側右金五兼忠常公之五□也慈父月岸尊靈様大菩薩施主同名次郎右衛門尉忠□清岸院妙達靈寛永五戊辰十二月七日外に古碑四基あり文字なけれ共詳ならず

麻賀多神社　公津臺方村小あり西所小祭祀り一ハ稷山小あり　元ハ栗山なるべし　地名小稷なと云字

と用ふるなり稀なり後人さらに改しなるべし公津ハ神津なるべし承応三年より臺方下方領

弁須大袋飯仲と五箇村小社後公津新田と云村出来て今ハ六箇村となる祭り

一ハ瀛津宮と云　都宮なるべし　此事猶後小見ゆ　船方村手黒と云地にあり　此地なる千　麻賀多明

座ともも云

神と称ス　佐倉の城下酒々井駅失蛇村其外　神名帳小印幡郡一座小麻賀多神社と

十八社あると云此神と稷山祭祀り

は此神の事なり社の傳ハ　應神天皇ハ御世印幡國造伊都許利命の時稚産

霊神と稷山小祭ル稚日霊尊と瀛津社小祀祭りと云　一説小ハ伊弉諾尊伊弉冊尊天照大神稚産霊命合

殿ふりと云へり

○神名帳考證土代云　伴信友著　麻賀多神社ハ姓氏録小豊城入彦命六世孫下毛

野君奈良弟真若君あり麻賀多ハ真若田なるうと云く此説を助て云く

祭神ハ稚産霊命なりとハ真若田ハ社号の義とハ云うて祭神小

甚遠くいふいひあやまりとも左ハ云あらず又真若田ハ社号の義とハ云うて祭神小

及ふるふあらぬ祭神ハ今詳なるべ　伊能穎則曰此説恐らくハ非なるべし　稚産霊ハワクムスビ真若田ハマワカタなれハ

稷山社に攝社五座あり印幡國造社幸霊社馬来田郎女社様田社天日津久

○成田叅詣記巻五　○四十一

社瀛津社小攝社三座あり賀志波比賣社阿須波社八代稲荷社　すべて祓

社と云あり瀬織津比賣神氣吹戸主神逸閑津姫神佐須良比咩神と合祭る

とりふ　瀛津社又内津社ともいふ是ハ伊都許利命の御　社傳ハ信けるべし

伊都許利命墓船方村手黒山社傍小あり周囲一町許高二丈許小山社如し

塚上小小祠あり金毘羅と祭祀り南の方小少しあるき一所あり石柳の小口

見ゆ同所薬師寺社向の小山なり船塚と云塚あり船塚ハ船方塚社省

起る所なるべ是亦國造社墓なるべし塚上小小祠あり稲荷と祭祀り

二月七日八月十六日社神事あり祠官を太田出雲と云　臺方村小太田と云字あり

又元屋敷と云地あり祠官の居地なりと云　此地名より出なる苗字

太田ハ大田文なりと司ル家なるべし

○此家小乾元中社文書あり　磯邉昌言社碑小見え貞治永正間の官幣

祝文等ある由佐倉風土記小載ル社ご閣齋派の神道者ふと後小偽造セ

しと見ゆ社ハ微とはなるべ　とい

此碑伊都許利命の墓上ハ建ル　こも例の時齋汝の神道者の説そ形ちに
と見らされと古さ所のなるとも載せらるるなり

伊都許利命墓

總之下州印波郡稷山之艮三百弓瀛宮之巽二十弓有巨壙為伊都許利命墓
墓安祠于上而配享二神已千有余載也謹按命者神八井耳命之八世而仕
應神帝為印波國造載于舊事本紀其祭雅產昊為國社祭雅日要為瀛宮乃見
於社司從三位藤家清乾元中所記焉以德容功業為名是上世之礼也伊都
即五土之數許利即凝金之質併土金為敬之義而至道存焉為民建社以垂治
統則其德功亦可知也已家清十八葉孫正六位屋玄追崇建碑請銘々曰

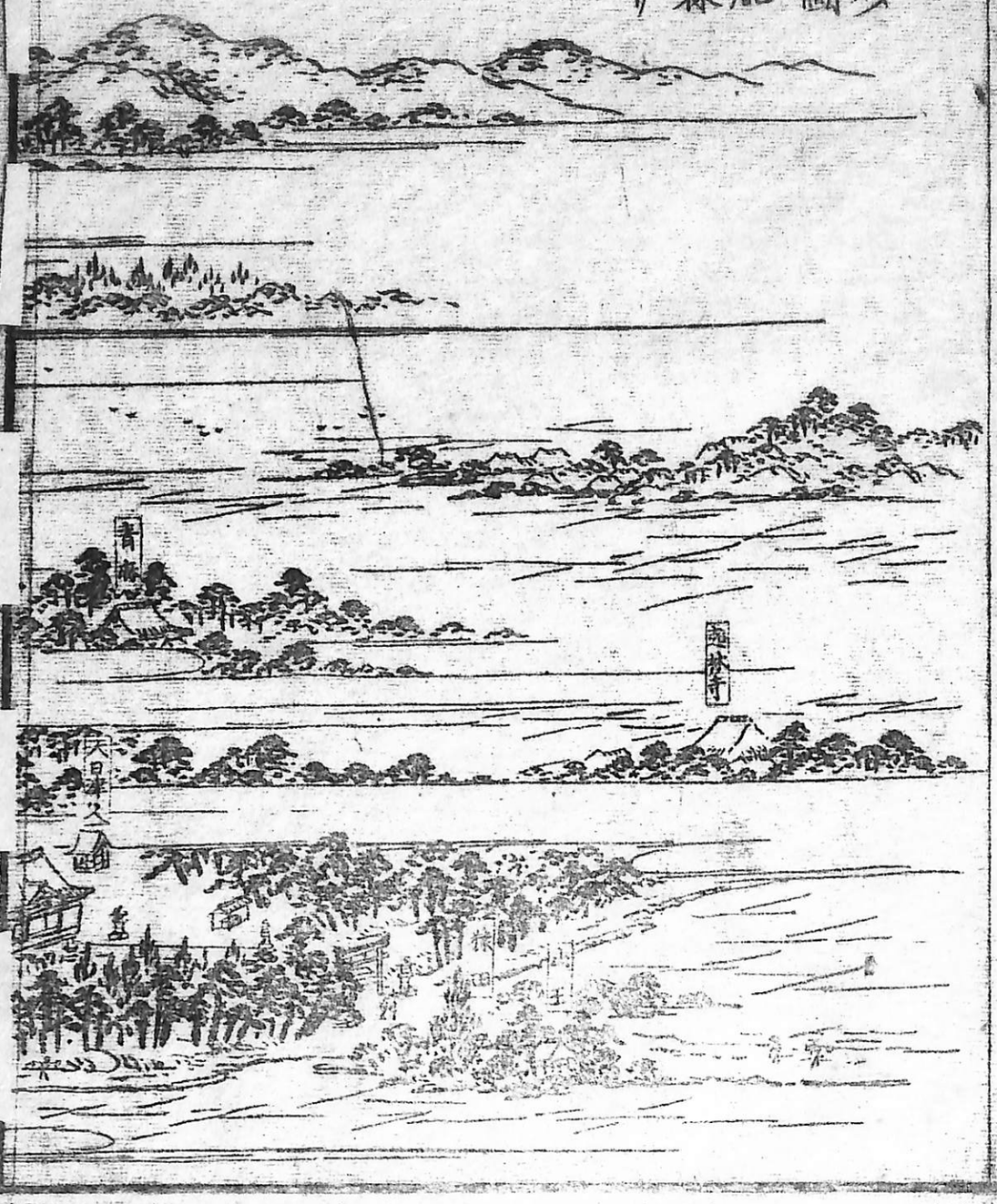
稷山之艮　瀛宮之巽　地當龍岡　魂殊燃道　維神維安　蘋蘩時獻
為鎮為守　德輝何遜　五凝示敬　百代凱愷　映邦共長　山環海浜

元文二年冬十一月　山州淀府行軍使磯邊昌言謹撰

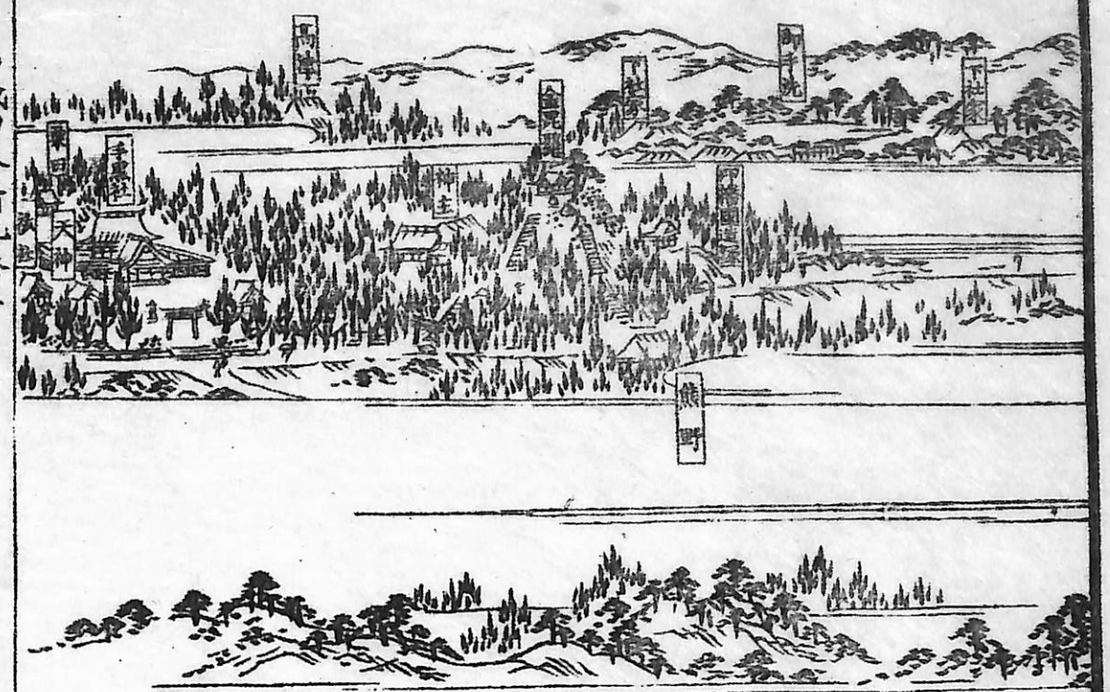
○昔ハ祭田七區あるて七家の祠官ゟて分領せらる七區とハ油免・薦布免・穂掛免・園子免・神酒免・御齋免・巫免・木なり　此地天慶中將門の一乱ゟ收公せられ承応三年ゟて除地ゟてあるしこの量歳ゟ

麻賀多神社圖

千葉貞胤碑ハ超林寺境内ニアリ

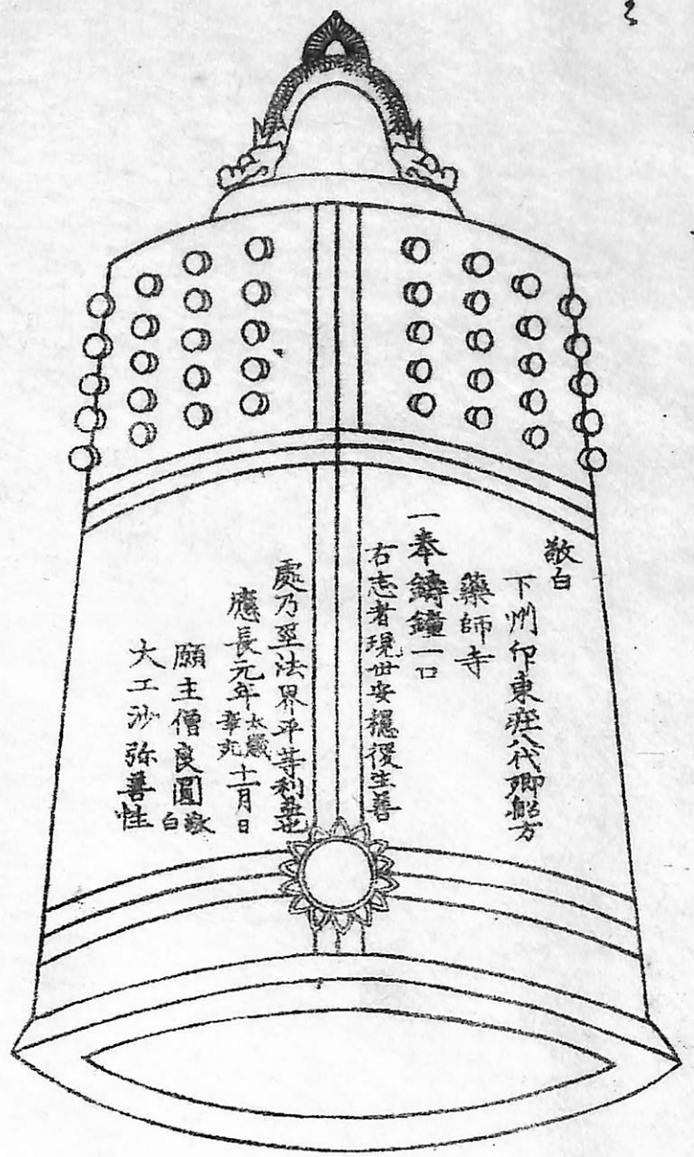


文禄中井田文書ニヨレハ八日市場ヨリ神津ハ馬ニテ神津ヨリ関宿ハ船ニテ是國初運送ノ次第ナリ

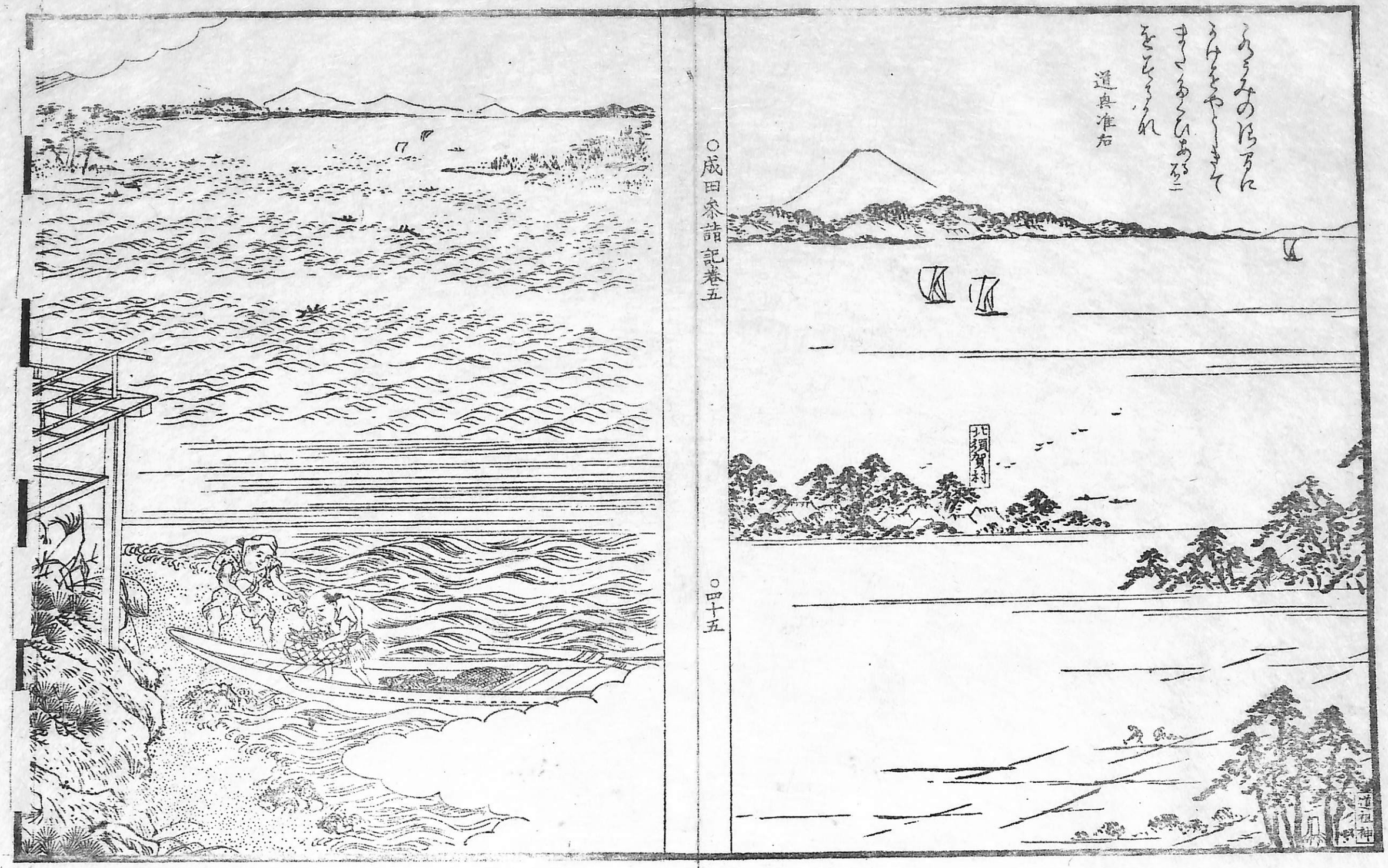


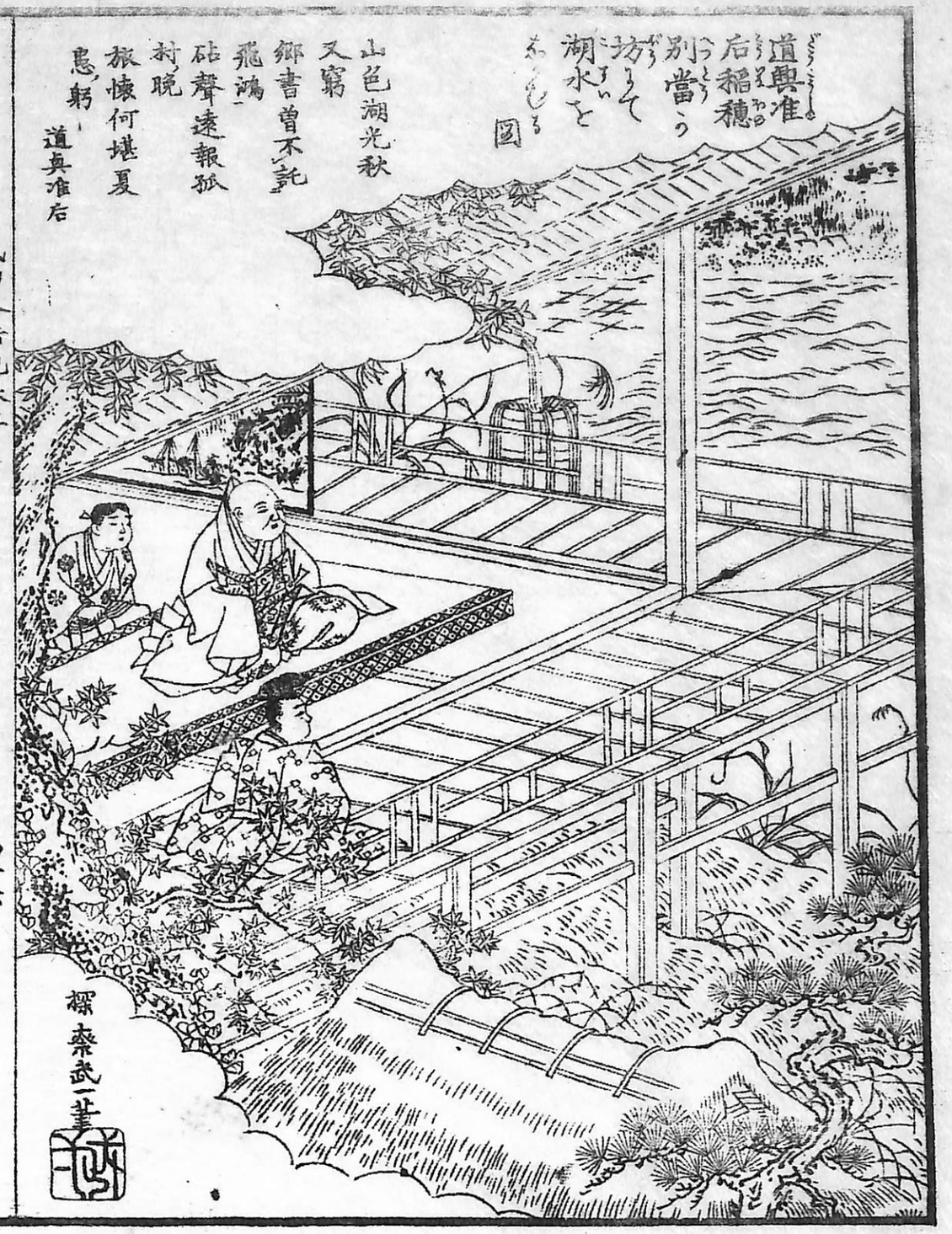
絶入となる　此地ハ七井七井ハ七井ハ七井ハ

舟形山藥師寺船方村ふあるゝ本尊藥師如來行基菩薩の開基伴なる此寺旗曼多羅と云古き板本を藏し古色掬すべしまた應長元年所鑄の鳧鐘一口あるゝ



或云善性八常陸人ニテ當時ノ良工ト見ユ那珂郡檜沢万福寺佐竹義長寄附暦應二年ノ鐘ニモ大工宍戸嶋井善性トアリ


ふるみの浦に
うみをやしまて
まさあるひあるこ
をたちられ
道真准后
北須賀村
道祖神



○太田屋敬云此寺もとハ麻賀多神社の別當にて本尊ハ薬師ハ本地佛と見えたり廻國雜記ニ載たる稲穂の別當も是なるべし今も北須賀船方二箇村ゟ祈願寺にて二百年前船方村ゟ文書ニも別當とあり（或云稲穂別当ハ佐倉の八幡社の別當ハなるさにや此地眺望ゟもとく且文明ゟ國のゟ社ハ又酒々井肥前坂の下に小別當と云地名あり昔址ゟ）

○廻國雜記上巻云九月廿八日稲穂ゟ別當う坊にて湖水ゟなをうて

山色湖光烽又窮　郷書曽不託飛鴻
砧聲近報孤村晩　旅懐何堪憂患躬

十月朔日ゟみて人ゟつ〻ゟ

ゟとりふ名ゟゟれとも神ゟ月ゟ吋るてゟ山のそしなゟ
ゟふゟ小ゟゟゟゟの神ゟ月けゟゟゟゟふゟ祝しゟ社ゟ形
ゟふ小春ゟ社ゟゟゟゟ

ゆなみ多くうむへきすりけまを

おうみの国ふみ者をおそみたるひあるふをそうれ

稲穂をたてりける道ふいろくにて名所とも付りいひ梅の歌をもあるを

付しるし途中にあるくなれを記をそれをそれをそ

宗五墓ハ公津畫方村にあるを墓木にて老松ハ天保四年癸巳八月朔日に大風

ふ折社て今ハ石碣のみ存せり 石碣ハ文化二年百年忌の時建るを云

岩橋山成就院大佛頂寺ハ下岩橋村ふあり寺領十石 天正十九年辛卯十月新義真言宗

醍醐三寶院末なり本尊ハ大佛頂尊開基詳ならず 鎬木布。千葉系図ふ岩橋成身院と云人見四郎人の開基なり

弁天社ハ別當を兼勤む 此寺慶長十八年寶永元年寶暦十年三度焼失ふ旧記灰燼となり其傳考ふへからず

○所蔵嵐跡心経 嵐跡心経と称するもの多くありさ社と直雅寶恵の書ハ多こハ昔ハ有るて佐渡國蓮華峰寺より持来るを云へ大師の真跡なり

○妙澤和尚ハ嘉慶ハ頃の人にして足利三代義滿公の時世ふ出まして大

紙ふ妙法ハ夢窓國師の法嗣にして不動明王ハ化身なり兒の時より

宗五祠の圖

宗五のことハ實録と俗傳とを骨壌の相違ひり藩輪譜及ひ公津村の割付等とて已ふて其誤りを悟まへ

大佛項寺所蔵

古鐸

此鐸弘法大師將來五箇の一之元東大寺ふありしと名所小散在せり

外ニ妙澤不動画三幅アリ

不動像龕

寛延二己巳歲十一月吉日源秉祐公御修造現住快照ナリ

好ゝて不動尊ゝ御影を画き本朝画史云毎日一号を画き怠らず
なく終ゝ世録年中五百号に至り験甚ゝ奇特をあゝ
ゝせしるを集ゝ江戸名所図会

○此寺庭前池中より出ゝと云ふ石ゝ識文ゝ瓶鹿可汲固志何傾嗚呼
群類水例與清とあり真間手児奈碑識とたなゝ只群を節婦ゝ作る
のゝ此と異なり何の故なるや詳ならず

吉田佐太郎陣屋跡　欠真間村ゝ有り親縁山了善寺と云浄土真宗の寺ゝ有る
地こまゝく里老云此寺児童のとき八吉田を名乗ることを例とす明和年間ゝ
ころ境内ゝ井を穿ちたしゝ石槨を土中より堀出せり其内ゝ鏡太刀等
を蔵す鏡八今ゝ什宝となり存す太刀ハ元のまゝ埋ゝと云　吉田佐太郎ハ國初の御代官なり

○鴻臺合戦草子に去間ゝ北條殿ハ夜半ゝまぎれて浅草川をうち越オホ
塚の宿をすぎて夜深に通りるとき敵を松津の堤にて評議のやうなくなし
ろ紙々まぎれレンセイ人目をつむことなれ紙々ゝ小弓をハまた夜深ゝ旅立

○成田家詰記巻五　○四十九

てゆけハ立ゝ城の浦浜ゝ稲もそゝそも生たること紙やめらるものさのいなゝ
わたりのハともたもひやる三川を越て過行ハこゝハ稲毛ゝ松山やその松風
ふるみて心ほそく見川ゝ川瀬の千鳥友呼も吾大君ゝ逢つ紙とき
ゝたまゝて佛神ゝ祈ゝたのゝ船橋のゝ通過ゝ仕
行程ゝ市川舟の渡ゝ我思ふ君ゝありやゝとゝゝ紙を松戸の
をゝけゝやさうみたいも着ゝゝ若ゝゝの浄願寺ゝ参りて云く
東海の法ゝ宗長永正六年上洛ゝ清澄ゝ一見せゝゝゝ
うさゝてとゝもゝ世ゝ紙ゝたち帰り江戸の里のふもとに一宿ゝすみたい
の河舟にて下総國葛西の庄ゝ河内を半日斗ゝ行しゝ枯ゝ難波の浦ゝうゝひてゝゝ紙て住し里ゝみえたりゝゝも都ゝ堀江と
くゝちゝて今井とゝふ渡りゝ浄土門の寺浄興寺にてむゝ馬人
待ゝ仕持出てものゝたりゝ序ゝ花ゝ小ゝくゝを紙ゝ程

[illegible]

方丈の西[illegible]むらひふしの[illegible]

のわたり中山の法華堂の本妙寺に一宿して翌日一折あと有しの句

斗を所望にすゝめて

杉の葉やはらはらと波の松いの雪

その夜の嵐はげしかりしことまてこなふいとに日毛出家してうし

かはら浦まで如[illegible]原[illegible]内少輔隆小弓の館の[illegible]人小演の村乃法華堂本

行寺旅宿ふる[illegible]十四日十五日千葉[illegible]崇神妙見の祭禮として三百疋の早馬

と見物し十六日八延年の猿樂座に入てこと[illegible]てぬ十七日連歌[illegible]

梓弓いそ[illegible]小貴代[illegible]の松

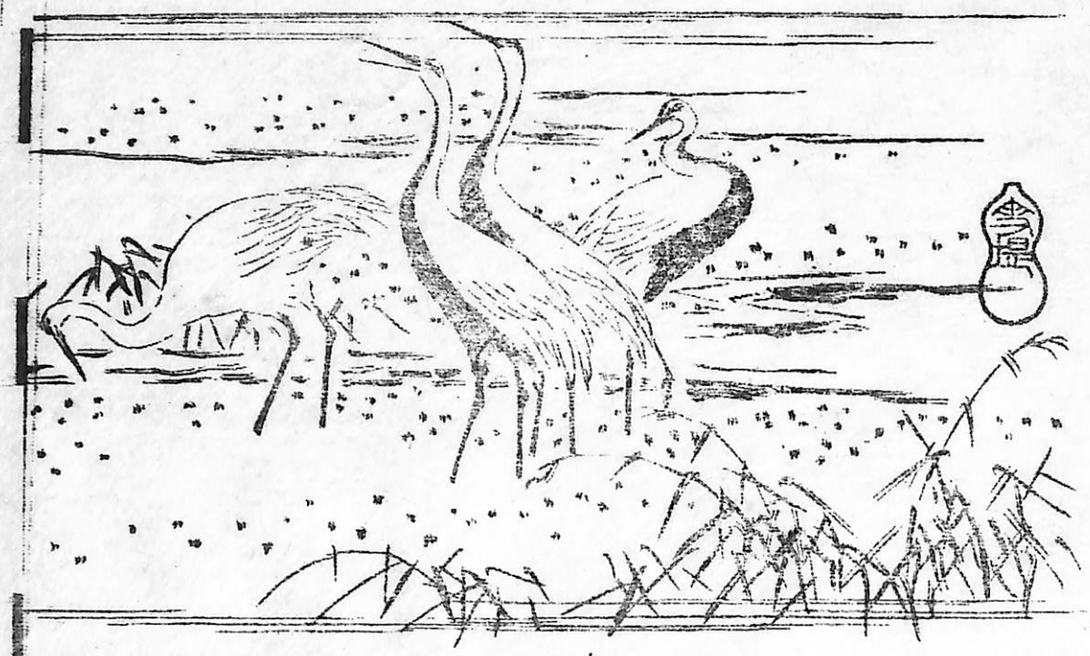
梓弓いそ[illegible]の小まつ[illegible]にの[illegible]世[illegible]みて[illegible]とまるけん此句歌に小弓

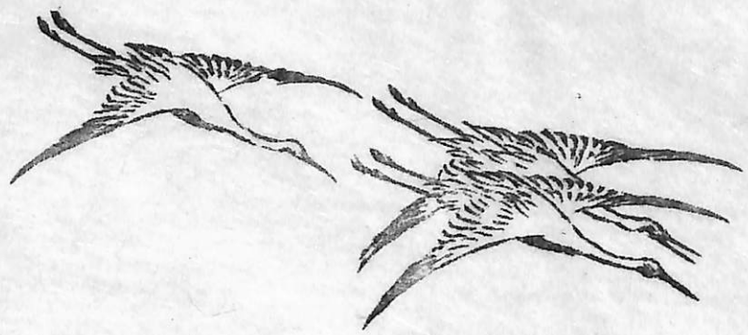
行徳畷の圖

今の行徳八元亀元年
川向行徳領より引移
るとゝ云

あさち集

たらちねの
ふるさと遠そ
[illegible]
[illegible]の[illegible]
あ[illegible]





とゝ名をとゝうして祝し侍る斗之故の館ハ南ハ安房上総の山たちめぐりて西北ハ海をゝくと入て遠く山接たゝ不二の白雪半天にはしゝおほゝしてこゆ駿河國ゝ見てみくりを猶かなたゝ遠くみるはちゝさ山ゝるべし

十九日又連歌あり發句流隆

はつ元し夜ゝ嵐やゝもむなゝ雲

あゝらあたらしゝく風情重格ちり腰

庭ゝ花ちゝるゝ雪ゝ雪ゝ春

發句小景氣おゝつゝよゝ秋ゝたゝ

して日のうちに終りぬ夜ゝ入て延年のゝみゝ衆徒ゝゝ廿餘人ゝゝ

ゝやゝゝひうたひ優ゝ舞ゝゝ百ゝ

ゝゝ花ゝの數ゝひ百ゝ

ゝゝて曉ちゝくなりぬゝゝ

寺ゝゝて

あるきて月やゝほひの濱ゝより
亂隆此第三經日ゝゆゝ一座こ山ゝて盃ゝたひくゝ行てゝふゝハ
いひしゝたゝ斗なるその行術ゝやゝたゝちんゝゝる夜更てゝく
たゝて月まち出るほゝもふく立歸りし名殘ゝ残ゝ死ぬ老ゝたゝひふ
れもひや社頃の孫兒ゝ行ほゝ歩行てうし老ゝ白波
俳ひさたりしゝ人のうたゝへ行ふゝ者ふゝたゝつゝし侍ゝこゝの村ゝたゝて
音みゝりゝふ所ふ酒風あまり烈しうゝしうゝた一言していまた日
ゝたうゝしに人ゝ物語の序ふ一折ふゝことふて
五ゝうゝハ藤ゝゝゝ社ぬあら社られ
可睡軒ゝゝゝてうゝ送て旅宿ゝふゝふゝゝゝゝにして翌日市川ゝ
ゝゝわたりの折ふゝ雪風ゝゝて志ゝ休らふ間ゝむゝひの里ふい
ひあゝゝゝ人ゝて馬ゝゝ社りゝてきてやゝて舟渡りしてゝの社業

○成田參詣記卷五　○五十二

の雪ゝうちはらひ善ゝゝゝゝいふふ岸つきぬたゝゝゝゝし朝ふゝし
此ゝハ炭薪ふゝゝゝ社りて芦ゝをわたき豆腐ゝやゝて一盃ゝゝ
めゝハ都ゝ杯ゝいゝてゝゝふゝらんゝゝ無ふゝ侍ゝけふの暮程ふ
會田彈正忠定祐ゝ言所ふゝて夕ゝ社後ゝ色ゝのゝゝて夜更ぬ時首
廿五日ゝて連歌ゝ社催しふ

堤川　野ゝゝゝ社の山路の郡

市川隅田川ふゝつゝ中の庄ゝ大堤四方ゝ発ゝりてゝゝりしゝもゝゝりて
山路ゝりゝゝゝ侍りしゝ江戸ふ歸りつゝて

下水府ノ家士ニ會田主計ト云人アリ元葛畧。西ノ地ヲ領セリトヱ此會田彈正ノ子孫ニヤ

○太田ハ誅セラレテ上杉朝良朝興ナト江戸ニアリシニヤ

武藏野紀行　北條氏康

葛西ゝ庄淨興寺ゝ長老ゝ八十餘ふゝ庵
ゝふ迎ふいてゝら社寺内ふ立ゝゝ一宿ゝゝ
ゝゝ寺ゝ行て一宿ほゝゝ夜ふ入風ひやゝふ吹たゝ松風入琴ゝゝ

と思ひいそ

松風に吹ちりさけるまもはゝ
宗長社地をうり地理を推るに江戸社館と立今井真間を経て中山に泊りを社より
濱野本行寺に泊り十四日十五日と千葉の祭りをみるに廿一二日の比まで逗留し廿二日
検見川泊り廿四日検見川を立市川をわたり會田社宿所小逗留し江戸社館小帰社に趣
なり日記詳なる紀行此也の水田まるまるあひしるみゆ何とも今のまゝとはしてうはりしみそ見てこたへ
早うゆ此也の水田まるまるあひしるみゆ何とも今のまゝとはしてうはりしみそ見てこたへ
考時近郊をみるとなるたよりなる紀行全文とあく
星住山善養寺小岩村とあり寺領十石慶安元年九月十七日新義真言醍醐三寶院末世と知られたる
不動尊ありて今も大地に小岩小市川と相對して善養寺往来より南社方なり此寺兩華
頂と云役寺あり城中星降松不動影向石所蔵古磬佛舍利出なり法印權大僧都賢融
大和尚慶安四年辛卯正月十三日と志るもる碑あり中興の傳なるべし

成田叅詣記巻五大尾

江川仙太郎刻